

# 日本醫學史雜誌

第 8 卷 第 3・4 号

昭和 33 年 1 月 15 日 発行

杉田玄白 140 年忌記念特集号

まえがき	(1)
杉田玄白史料解題	(3)
著 述	(3)
遺墨および肖像	(14)
関係文献	(27)
関係史料	(33)
遺 蹟	(41)
主要研究論文一覧	(43)
杉田玄白年譜	(46)
杉田玄白の学統	(55)
杉田玄白の家系	(57)
編集後記	(65)

通 卷 第 1349~50 号

日 本 医 史 学 会

振替口座 東京 15250 番

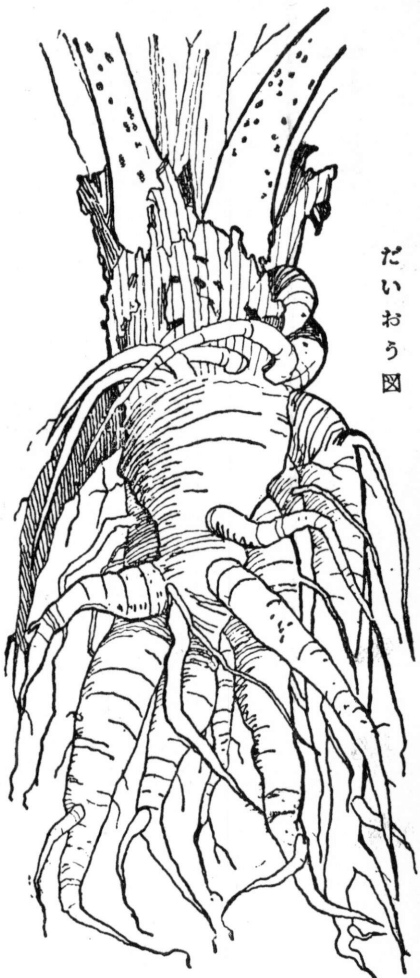
東京都板橋区・日大医学部内山生理

# 漢方処方 の 長所を集めた

本剤は「傷寒論」中の「小承気湯」と「金匱要略」中の「厚朴三物湯」及び「麻子仁丸」の薬方の長所を集めて創られた製品で、4錠中に次の処方によって抽出された有効エキスを0.3g含有しています

大黄 1.0g 杏仁 0.1g 芍薬 0.1g  
枳実 0.1g 楝椰子 0.2g 和厚朴 0.2g

効能…常習性便秘、急性・慢性胃腸炎及びその後の便秘、妊娠・産褥・月経時の便秘、心臓・腎臓疾患時の便秘、虚弱者及び老人・婦人の便秘、坐業・異常摂生による便秘、神経質等に伴う便秘。



だ  
い  
お  
う  
図

## ★漢方新緩下剤

# オートール 糖衣錠

(包装) 50錠入 >々<々<

ウロコ印



大阪市道修町

武田薬品工業株式会社

(東京・札幌・福岡) (04)

武田薬品

杉田玄白といえ、彼の不朽の名著「解体新書」と「蘭学事始」とともにあまねく知られており、西洋学の草創、科学の先駆者として誰知らぬ者はない。日本の医学史を研究する者は、多少とも必ずや一度は杉田玄白に手をつけている筈である。彼が日本医学史上のゆるぎなき王座を占めていることは、何人といえども異論のないところであろう。近代の日本文化の原動力となつた蘭学の開祖として、史家も齊しく認めているので、従来、杉田玄白に關係した研究や論考もきわめて多数に上つてゐる。しかし、彼の全貌を適確に把握した評伝の類は驚くほど少く、学術的な専門書は皆無と称するも過言ではない。これは玄白關係の史料が少数しか現存せず、また彼の多趣味と深遠な学識はひとり医学のみならず、きわめて多方面に亘つていて、一人の研究者が早卒のうちに調べることが不可能であることに原因している。

昭和三二年は杉田玄白の死後一四〇年に當る。本会はこの機会に偉大なる杉田玄白を改めて追慕し、あわせて医史に關する知識を普及すべく、杉田家遠祖ゆかりの地たる横浜の新装なつた神奈川県立図書館に於て、六月五日から十日まで『杉田玄白展』を開催して一般公開をなし、六月八日には日本医史学会の例会をかねて緒方富雄・内山孝一・小川鼎三の三氏による講演会を挙行した。

この展覧会においては同図書館挙げての絶大な協力により、現在集め得る限りの玄白關係資料四十数点を一堂に列べ、懇切平易な詳しい解説を一点ごとに附した。その展示方法、会場内の構成は従來のどの展覧会にも見られないユニークなものとして、来会者一同の絶賛をうけた。また玄白の末孫である杉田宗家の松夫、分家の浜男・秀男の当主三氏も列席され、名実とともに玄白一四〇年忌をかざるにふさわしい行事にすることが出来た。

この機会に、かくも多数の門外不出の史料を一時的な展観のみで終ることはまことに惜しく、広く研究者の参

考に供すべくまとめて公刊すべきであるとの意見が起つた。玄白史料は戦災によつて失われたものもあり、すでに所在を失して散佚したものもある。今にしてはつきりした記録を残しておかないと、今後どのようなようになるかも知れないものもあるので、展観の際に作製した解説を、さらに一々実物について精査して史料解題を編した。また新出の記録に基いて杉田玄白の家系と年譜の決定版を作ることが出来たのは、この展観の大きな収穫といわなければならない。

さらに錦上に花をそえ、従来未公開の「百鶴図」と、単色写真でしか知られなかつた「芝蘭堂新元会図」の二点を、バイエル薬品部の好意により原色版で複製して、お頒ちすることになった。われ／＼はこれによつて始めて原作のおもかげに接し多年の渴を医することが出来る。改めてバイエル薬品部の御厚意を謝する次第である。

本稿編集に当り、史料解題と年譜及び学統の三篇は石原明が執筆し、家系については神奈川県立図書館の三森達夫氏の好意ある助力を得た。ことに書状の釈文は文学博士関靖氏の手を煩わした。こゝに深く感謝する。また貴重な資料を本会のために、快く提供されて学界に紹介することに御協力下さつた所蔵者各位に心から御礼申上げるとともに、一四〇年後の現在もおかつ先祖の榮譽を継承されて、益々家名をあげておられる杉田三家の当主の方々の御尽力に心からなる謝意をささげる次第である。

なお、杉田玄白の未刊隨筆の類は、日本医史学会第六十回總會の記念事業として、近い将来印刷に附して大方の座右に備えられるよう計画していることを申しそえて、まえがきとする所以である。

昭和三三年早春

# 杉田玄白史料解題

## (一) 著 述

### 1 瘍 科 大 成

杉田玄白の著述について現在二三部をわれ／＼は知ることが出来る。そのうち明治初年までに木版で刊行されたものはわずか七部に過ぎず、未刊本で明治以後今日まで活版に翻刻されたものも四部を算するのみで、題名の明らかな著述の半数に満たない。二三部のうちに、青柳文蔵の「続諸家人物誌」や穂亭主人の編に係る「西洋学家訳述書目」に記されている「天真楼漫筆」と「天真楼雜稿」は目下所在が不明で、前者はあるいは「和蘭事始」の異本かとも思われるし、後者は彼の日記「鸚齋日録」中に散見するような雑文を集めたものであつたかとも想像される。ここには管見に入つた二〇部の著述について、おおよその紹介を試みようとしたものである。簡に失したことを諒とされたい。

八卷、玄白二七才頃の処女作である。明の「外科正宗」をはじめ、十数部の漢方外科書より病名別に編集録出したもの。末に処方集を附す。従来本書は刊本「蘭学事始」に附した杉田玄白の記載（もと大槻玄沢の筆記した小伝を転載）によつて四五才頃『新ニ日本一流外科ヲ創建セント思惟シ、漢土ノ書籍中外科ニ係ル確言要語ヲ逐一撰集』したものとされてきたが、内容や成立の事情より少くとも青年時代の作であることが明かである。中年におよんではヘイステルの外科書の反訳に手をつけていたので、この記載は訂正を要する。流布本は多くは抄本で、処方集だけのものが多い。未刊本であつて伝写のみで伝えられた。本書のほぼ完備せる八卷本は京大富士川本の中にある。蘭学に手を染める前の玄白の医学を知る貴重な史料で、家学のオランダ流外科に対して疑いをもつていた状態の一端が推知出来る。

## 2 広瘡 総論

一卷、本書も未刊本で流布きわめて少く、僅かに「瘍科大成」に附録して合綴したものが京大富士川本中にあるのと、他に著者名も明記のない粗末な伝写本が存するのみである。やはり青年時代の作で「瘍科大成」を編した時の副産物と思われる。梅毒に関する専書で、おもに漢籍の所論をとつてはいるが、当時おこなわれていたいくつかの流派の療法にもふれている。主として水銀剤や山帰来などの生薬の処方を書いてある。江戸中期の梅毒に対する思想を知る好史料であるとともに、初期の梅毒の専書としても疾病史上重要な文献であろう。また玄白の蘭学以前の医学を知るうえに「瘍科大成」とともに貴重な存在である。本書は今まで全く知られなかつた玄白の著述で、片々たる小冊であるが再認識すべき文献として今後の研究をまつものである。広瘡とは広東から伝播した瘡との意で、梅毒の異名である。

## 3 解体約 図

全五葉一組、安永二年（一七七三）刊。「解体新書」の公刊の前年に、世人の反響をみるため内容紹介の意味で出版した五枚一組の一枚摺である。杉田玄白が本文を記し、中川淳庵が校訂し、図は熊谷元章が描いて江戸の須原屋から売出した。その結果、玄白らが懸念していた発禁も反対もなかつたのでこれに力を得て世紀の大著「解体新書」を公けにしたのである。したがつて本書は性質上流布きわめて少く、現在杉田鶴子博士が生前慶応大学に寄贈した一本のほか、暉峻義等・石橋栄達両氏所蔵の三部しか知られていない。

本書を「解体新書」と比較してみると、単なる抄録や要約ではなく、図も異つており、これ自体独立した一部の解剖書であることが明かである。また本書の本文によつて玄白が西洋医学をいかに適確に把握し、自家のものとしていたかが判る。玄白ときに四一才。「ターヘル・アナトミア」入手後三年目に当る。本書は緒方富雄氏著「蘭学のころ」に写真版で全部収載されている。

#### 4 解 体 新 書

四卷附図一卷五冊、安永三年（一七七四）八月刊。

明和八年（一七七二）三月五日、すなわち玄白らが骨ヶ

原で腑分を見た翌日「タ

ーヘル・アナトミア」の

反訳に着手以来、稿を改

めること十一回、四年の

日子を費して完成した本

書は、その意義と内容に

ついて今更多言を要しな

い。医学史のみならず日

本文化史上の重要な文献

の一つである。

「ターヘル・アナトミ

ア」の原書の本文のみを

訳して漢文で記してあ

り、図は諸書を参考として取捨し秋田の小野田直武が描い

たものを精巧な木版にしてある。本書成立のいきさつは

「蘭学事始」に詳しいから今またここに贅しない。

現在もなお用いている解剖学術語が数多く見え、また漢

文で記したのは今まで中国から教えられていた医学を、逆

に真理を伝えようと考えてあえて漢文に作つたもので、そ

の意気はまさに天を衝くものがある。玄白の著述のうち、

漢文で記されたものはす

べてこのような意図に発

しているものと解され

る。玄白時に四二才、前

野良沢ほか同志の協力が

あつたとはいえ、不十分

な訳と知りつつも一日も

早く真理を伝えようと、

夜を日について草稿を整

理した苦心を察するに余

りある。クルムスの原序

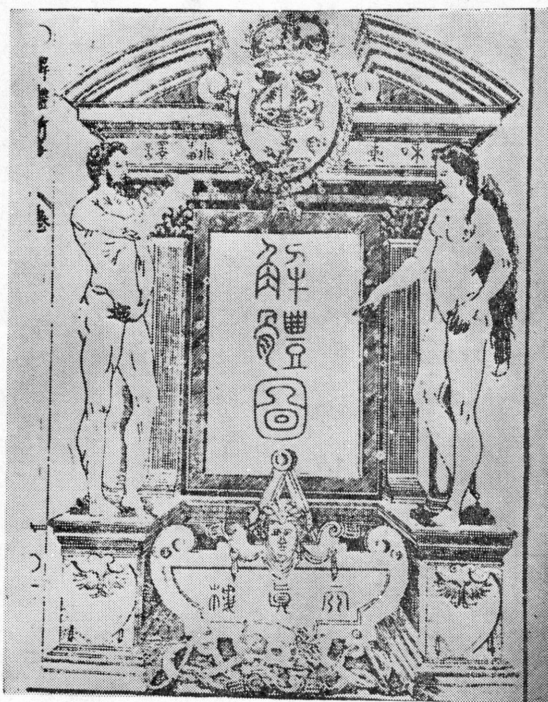
のみひとり玄白の訳にな

るものらしく、本文の訳

を原書と比較する時、いく分拙劣さが目立つが、これはか

えつて玄白自身のオランダ語の学力を知るによいばかり

となつている。「文明源流叢書」「大日本思想全集」に収載。



## 5 狂医之言

一卷、未刊写本。安永四年（一七七五）十月の作。「解体新書」公刊の翌年、藩邸当直の余暇に漢文で記した短篇の医学評論である。すでに解剖学を通じて医学の真理を悟つた玄白が、当時の医学に対してどのような意見をもつていたかを知ることができる。「和蘭医事問答」刊本巻末の『紫石齋刻目錄』中に出版予告があり、『和漢古今の医説を看破し西医の説によつて医道を弁正す』と紹介されているが未刊に終り、伝写本ただ一部のみ故藤浪剛一氏の許に存したが、その後散佚した。京大富士川本などはその転写である。全文はかつて原田謙太郎・安西安周両氏により読下しとして、昭和十七年九月二六日の「日本医事新報」に掲載され、またその後現代語訳を緒方富雄氏が「医学のあゆみ」に連載されたことがある。

漢文で記されている点が、前述のように玄白の文章としては異色である。内容から察するに「解体新書」に対する批難に弁明したものであることが明かである。

## 6 的里亜加纂稿

一卷、未刊写本。玄白四四才頃の著述と思われる、これまた彼としては異例の漢文で綴られている。

テリアカとは、解毒の効ある万能薬として古来著名な西洋の古い薬剤であつて、蘭方医家の間でもこれが本質の究明に多くの努力が払われていた。玄白は「解体新書」完成のちオランダ医書からこの処方を検出し、最も有効と思われる数方を取り、調製法を詳しく紹介しこれを前野良沢と中川淳庵に見せた。内容はとり立てゝ論ずる程のものではないが、西洋の薬物にわが国産生薬の何を充てるかという同定又は代用に苦心したあとが見える。

本書は写本のまゝで伝えられたが、蘭方必須の薬剤を説いたものであるから、伝本は比較的多く、書名も一定せず『底野迦方纂稿』または『底野迦真方』と題したものもあるが、内容は伝写の誤りを除くほか、ほぼ同一である。玄白の臨床医家としての研究態度を知る好資料たるのみならず、製薬法を詳述したのとして薬学史上重要な文献である。



## 6 大西瘍科書

卷数不詳、未刊写本。玄白四七才頃の著述で、現存するものただ一部、卷三の零本一冊が大槻文庫に伝わるのみである。ヘイステルの外科書 *Heelkundige Onderwijzen*. 1755. の抄訳が、「解体新書」の反訳完成後、すでに宝暦十一年（一七六一）春、江戸参府のカピタンに随伴して来た吉雄耕牛から借覽して真価を知つていた玄白が、外科書の反訳の着手第一に行つた草稿の転写本と思われる。ヘイステル外科書は老大なため、玄白は一部分のみを抄訳したに過ぎず、養子の伯元や門人の大槻玄沢らに命じてほぼ訳しおえた。「紫石斎藏刻目錄」によると「瘍医新書」と題したヘイステルの邦訳は病門二五〇に分れ、金瘡之部二二条と瘡瘍之部二九条の部分が玄白の手に成り、余は伯元と玄沢の追訳となつてゐるが、のち出版されたものはすべて玄沢の改訳にかかる。

本書は「瘍医新書」瘡瘍之部の未定訳稿と考えられるが、卷三のみの零本であるため確実なことは明かでない。今後新出の資料に期待するものである。

## 8 乱心廿四条

一卷、未刊写本。天明三年（一七八三）玄白五一才の作で、他の随筆とおもむきを異にした処世教訓集。玄白が懇意の吉原の女郎屋扇屋勤兵衛がその子に教えた処世訓を玄白がまとめて筆記したもの、学問も教養もなく五十才までに十八度も業をかえて、最後に青楼の主人となり巨万の財を築いた勤兵衛を、玄白は身分や地位を措いて人格的に敬意を払つていた。ここにも玄白の飾り気のない赤裸の人となりが見られる。

本書は今まで全く知られなかつた史料で、玄白自筆の原本を杉靖三郎氏が大槻家の反故中から検出して学界に紹介された。伝本は現在この一部のみである。内題に『忘八扇屋勤兵衛隨筆 乱心廿四ヶ条』と題され、末に玄白のあとがきがある。内題の首に見える忘八とは俗語で貞操なき者の意、勤兵衛が女郎屋の主人であるから名付けたもの。乱心とは狂的状态、マニアのことである。この全文はかつて杉氏により「綜合医学」第五卷（昭和廿三年）に掲載された。

三卷、未刊写本（のち翻刻）。小浜藩用達の石屋龜岡宗山が記した明暦大火の記事を、玄白はその孫に見せられた。そこで玄白は鴨長明の「方丈記」にならい、宗山の遺稿をそのまゝ上巻とし、中巻以下にその後の天変地異を書き継いで天明七年（一七八七）白川侯老中職となり万歳を唱うる記事に終る。玄白五五才の著述で、鋭利な諷刺のうちに滑稽と皮肉をたたえた異色ある評論である。従つて明暦より天明に至る江戸を中心とした世相の実態を忠実に記録したものと歴史にも有益な文献である。伝本必ずしもすくなくないが、誤写脱簡多き本が通例で善本は稀である。明治十七年（一八八四）活版に附して「史籍集覧」に収められて流布したが、著者を全く誤り本文に誤脱が甚だ多い。のち「燕石十種」に収められたものはやや善本に近いが別人の附録があり、かえつて玄白の著述の真をさること遠くなつてゐる。

二卷、寛政七年（一七九五）刊。奥州一関の藩医建部清庵（名は由正）は弟子の衣聞甫軒が江戸に出る時、年来疑いをもつていた事項をまとめた質問書を明和七年（一七七〇）に託した。それがたま／＼玄白の手に入り「解体約図」を添えて返書を送つたのは安永二年（一七七三）正月のことであつた。そのちも質疑応答がおこなわれ、兩人の仲は親密になつたが生涯ついに対面の機はなかつた。この往復文書は蘭学の初学者によい参考となるので、「蘭学問答」とか「瘍医問答」と題されて伝写されていたが、のちに清庵の五男で玄白の娘扇と結婚して養子となつた伯元が、伝写の誤りと労を省くため校訂して上木したものが本書である。「紫石斎藏刻目錄」には、後編続編ついで出だすとあつて、兩人の質疑応答は本書に収められた二度だけでなく、何通かの書状があつたらしいが今はすべて伝えられない。「文明源流叢書」第二巻に収載されて広く流布している。

## 11 養生七不可

一卷、享和元年（一八〇一）刊。玄白古稀の前年、すなわち享和元年八月五日是有卦に入る日に当たるといので、一族や門人が祝宴をはり、不の字のついた七品を贈つて玄白の健康を祈つたので、子孫のため養生の大要を七不に因んで記したものだ。いわゆる養生七不可とは、昨日の非は恨めすべからず、明日の是は慮念すべからず、飲と食とは度を過すべからず、正物に非れば苟くも食すべからず、事なき時は薬を服すべからず、壮実を頼みて房を過すべからず、動作を勤めて安を好むべからずの七条で、各条下に和漢蘭の書や実例を引いて周到に説いている。末に大槻玄沢が師に倣つて作つた『病家三不治』を附す。本書は性質上知友に頒つた配り本であるため、刊本でありながら案外に伝本が少い。玄白の側面を知るよい資料であるとともに、養生の文献としても異彩を放つものである。大正六年に三宅秀・大沢謙二両氏の編に係る「日本衛生文庫」第一輯に収載された。

## 12 鶴亀之夢

一枚摺、天保三年（一八三二）刊。享和元年（一八〇一）十月晦日、玄白の書齋で愛用の文房具が夢で身の上の自慢話をした態になぞらえた世評諷刺の戯文。短篇ではあるが興味深い。原文は玄白の日記の享和元年十二月五日の条にも記されている。翌年の春古稀を迎えた玄白は、人に乞われるまま絵を加えて一幅に揮毫して与えた。のち天保三年に後嗣の伯元が自分も古稀を迎えるに当り、父の遺墨が散逸するのをおそれ、そのまま上木して知友に頒つた。従つて玄白の著述中では異例の刊本といふべきで、性質上伝本極めて稀。さらに玄孫の六蔵翁が昭和十四年に古稀を迎えた際、家の佳例にならつて天保三年の一枚摺を、凸版で複製し知人に頒つた。これとても現存するものきわめてすくない。

落款は『七十翁九幸（花押）』とあり、古稀以後は九幸の号を多く用いている。玄白の古稀の筆蹟は他に伝存しないので、遺墨鑑定上の重要資料である。

### 13 形影夜話

二卷、文化七年（一八一〇）刊。享和元年（一八〇二）十一月玄白七十才の秋、酒井侯の女房二人の出産に際し当直した夜、つれづれなるままに障子にうつるわが姿の影法師と問答した体裁で記した医道や世相の評論隨筆。玄白の日記によると、この十一月は、四・七・十二・十九・二二・二五・二八の七日若狭藩中屋敷に当直しており、二日には女子が生れ、さらにもう一人は十六日夜半男子を安産した由が記されているから、「形影夜話」の成つたのはこの七日のうちであろう。宿直の夜の公務の余暇までも利用した玄白の勤勉さを知るとともに、内容に汲めども尽きぬ滋味を看取することが出来る。名文とはいえないが思うことを卒直に表現した彼の文章は、わが国の医家の文として範とするに足る。出版に当り巻頭に石川大浪の筆に係る七八才の時の肖像を刻している。刊本「蘭学事始」の肖像はこの図を模したものである。全文はかつて富士川游氏らにより「杏林叢書」に収められ、滝浦文弥氏の翻刻もある。

### 14 玉 味 噲

一卷、未刊写本。文化二年（一八〇五）玄白七三才の時の隨筆で、功成り名遂げた老年の玄白が「解体新書」公刊後、世に認められ学徒笈を負うてその門に集つた盛況を回想し、隱居ののちかねてから石川丈山に私淑し、自ら小詩仙翁と号し、またすでに「後見草」で鴨長明に自分を見立てた玄白が、悠々自適風流三昧の理想として考えた小庵の結構、道具立てを述べた和文隨筆。小庵の平面図、携帶用道具箱の図入り、首に玄白歿後七七忌（文化十四年五月廿七日）に遺稿中から本書を見出した旨の門人岩松義則の漢文序を附す。

書名の「玉味噲」は玄白の自序によれば、蘭学首唱のことと述べたので手前味噲であり、文は雅俗を混じているので、田舎の味と臭の悪い玉味噲に似ているから名づけたいという。

本書は従来未知の玄白の著述で、伝写本僅かに一部が富士川游氏の手であり、近年世に出でたもの。この本はいま慶応大学医学部図書館に蔵されている。

三卷、未刊写本。文化四年（一八〇七）玄白七五才の著で、家督を養子伯元に譲り隠居したのち著述したものと伝えられる。「形影夜話」と同じ趣向で、影法師と自分との問答に托して当時の世相を述べ政治批判をなし、進んで外攻に対する積極的な手段を論じた書。幕府の政策に対して思い切った批判がくだされており、江戸の防備についての私見も極めて適切で、玄白の政治眼を知るに十分である。憂国の志士玄白はひそかに国の前途について心を痛め、胸中深く期するところがあつた。太平に馴れ柔弱となつた旗本や奢侈に耽溺している諸大名にひとり憤激をもつていたのでなく、その根本的は正の方策を考えていたのである。本書はその性質上筐底に秘められ公開されなかつたので伝写はきわめてすくない。ようやく明治廿四年に「温知叢書」に収められ翻刻されてから始めて流布し、のち数種の叢書に入れられたものはすべて「温知叢書」にもとづいて

現存九冊、自筆稿本。天明七年（一七八七）玄白五五才の正月より文化二年（一八〇五）三月廿五日七三才に至る間の自筆の日記である。うち寛政五年（一七九三）九月より同七年五月に至る一冊は現在失われていて、現存数は九冊。毎冊約五〇枚の罫紙を綴じて褐色の表紙を附し任意に書き継いでいる。表紙は自筆で「鶴齋日録」とあり、全部で何冊書かれたものか判らない。恐らく若年から生涯を通じて書かれたものであろう。玄白はすこぶる几帳面な性格で、毎日の出来ごとを細かく日記につけていた。句あり歌あり詩あり、世上の風聞や患家のことまで細字で記されているので玄白晩年の日常生活を知る貴重な史料である。この日記は長く杉田家の筐底に埋れ虫害が甚だしかつたが、昭和十年に原田謙太郎氏により再発見され修理が加えられた。全文は昭和十九年に「杉田玄白全集」第一巻として公刊された。この日記によつて玄白の眞の姿を解明することができる。杉田秀男氏の秘蔵にかかる。

現存歌集一卷、未刊写本。本書はもと全部で何巻あつたものか明かでない。現存するのは『歌之一』と記した一卷のみで、ただ一部慶応大学医学部図書館に所蔵されている。富士川游氏旧蔵本。別に富士川氏旧蔵に詩集一卷があり「遺稿」の一部であつたが、近時散逸して伝を失つた。再出現を期待するものである。現存の歌集は『惜陰斎』の異紙に写され、文化四年（一八〇七）の作品全部と翌五年の秋までおよび文化三年秋の和歌が季節順に記されている。歌数全四四四首、題詠も多いが紀行歌や贈答歌もすくなく、中にはかなり長い詞書のあるものもあつて交友関係や玄白の風流を知るよい資料である。歌は決して巧みというほどではないが達意の歌で古今調のものがおおい。玄白が誰について和歌を学んだかは判らないが、日記の中にも散見するので、折にふれては詩興を生じて詠じたのであろう。七五才前後の玄白の日常と風流を知るに欠くことのできなないものである。

二巻、伝写本。いわゆる「蘭学事始」の古写本は現在七部知られている。書名のうえから二類に別つことができ、「和蘭事始」と題する書は内山本（内山孝一氏蔵）幸田本（幸田成友氏旧蔵、慶応大学附属図書館現蔵）福沢本（福沢諭吉自筆、現蔵同上）の三本で就中、内山本は書写年代もつとも古く原本に近いテキストとして重視されている。もと勝海舟の旧蔵で昭和廿二年に新発見された。福沢本は明治二年刊本の底本になつたもので扉の書名の和を消し学の字を加えている。「蘭東事始」と題するものは村岡本（村岡典嗣氏旧蔵、天理図書館現蔵）矢野本（矢野宗幹氏蔵）佐藤本（佐倉順天堂旧蔵、現時所在不明）小石本（小石秀夫氏蔵）の四本で、あるものは大槻玄沢の題字を存し書名も玄沢の命名にかかる。玄白自筆の原本は文化十一年（一八一四）玄白八二才の時大病にかかりその恢復後執筆を始め、翌春に脱稿して校訂を大槻玄沢に托したが安政二年（一八五五）の江戸大地震で焼失したという。翻刻本については附録の玄白関係研究書を参照のこと。

二卷、明治二年（一八六九）刊。幕末に神田孝平が湯島聖堂裏の古本屋で発見した「和蘭事始」にもとづいて福沢諭吉が写したものを底本とし、後世に残す意図で諭吉の出資により木版で刊行したもの。現在一般に流布している「蘭学事始」の祖本である。首に「形影夜話」にある石川大浪筆の玄白肖像を復刻しているが、板木の虫喰痕をそのまま強調したため、誤つて側頭部に静脈が怒張しているかの感を与えるがもとより真ではない。杉田玄端の記した略伝と杉田廉卿の序を附刻す。最近底本の福沢本の出現により、もと「和蘭事始」とあつたものを諭吉が「蘭学事始」と改題したことが明かとなつた。この刊本は後世に残す目的で営利を離れた自費出版のため、近世の刊本であるにかかわらず現存部数はさほどおおくない。のち明治二三年、日本医学会第一回総会に当り西洋医学開祖の六家の霊を祀り、記念のため活字で再版して頒つた。これには福沢諭吉の再版の序と長与専斉の『近世医事沿革』が附録されている。この再版本もきわめてすくない。

一卷、未刊写本。文化十三年（一八一六）の春の著で、時に玄白八四才、著述としては最後のものである。この年正月九日の節分に八十四才を迎えた彼は、例の得意の計算法で生来二万九千九百十九日になり人々はその天寿を羨んでいるがおいぼれると思うことも自由にならないとて老の線言を並べ、高齡は決して楽しいものではないことを知らせるためにこの一篇を記すという意味の自序がある。内容は一種の回想録体の自叙伝で、「蘭学事始」の欠を補う玄白史料として重要である。末尾に大槻玄沢の漢文の跋があり、老いぼれたと称する師の精力絶倫なるをたたえていゝ。本書は伝写本ただ一部のみで、「玉味噲」と合綴され、慶応大学医学部図書館の富士川本中に存する。かつて大鳥蘭三郎氏により一端が「医学生とインターン」誌上に掲載されたほか公表されていない。玄白の最後の著述として重視すべき文献である。

## 20 天真樓試功方

一卷、未刊写本、玄白の常用処方を書したものの。古いオランダ流の外科を伝える杉田家で父祖から伝わる有効な家伝の秘方と漢方外科の処方、それに苦心して玄白が集めた諸家の秘方を載せてある。一見雑然としているが彼の医学に対する熱意が溢れ、代用薬に苦心した形跡が明かである。一般に流布している伝写本の「杉田先生家蔵方」は門人らが抄写した本書の抄録で、家塾本として備えておいた常用処方集が本書であろう。玄白の実際の臨床手腕を知る好資料であり、有効な処方はどんなものでも採用して自家薬籠中のものとする実証主義がよく表わされている。玄白自身の手控えに方を得るに随つて追録増補していったものらしい。従つて著述年代は俄かに断定することは不可能であらう。

## (二) 遺墨及び肖像

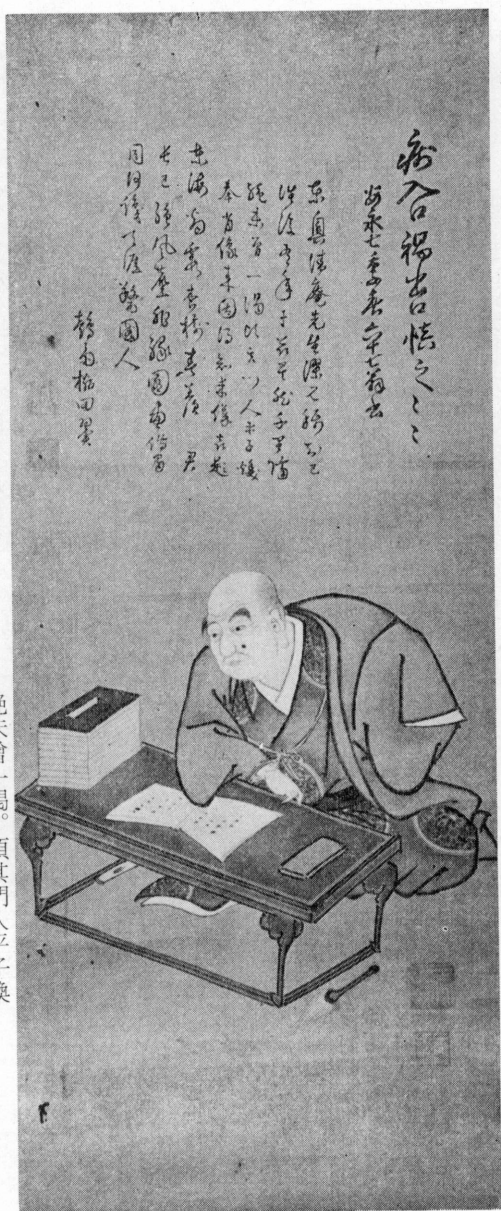
杉田玄白の遺墨はかなりおおく現存しているが、そのおおくは書状で年代の明かでないものが大部分である。従つてここでは年代の明かなものと、自筆の絵画および年代の明確な賛をとり年代順に排列して解説を加えた。これによつて玄白の筆蹟を鑑定する際のつけ石として役立てば幸いである。玄白の遺墨と称するものうち私の経験によれば色紙・短冊の類は偽物がおおく、幅物でも表具が豪華なものは大抵真蹟でない場合がおおい。かつて玄白自筆と称する蘭文の横物小品を見たことがあるが、もちろん偽物で感望と落款の印が全く見馴れないものであつた。偽物は明治になつて作られたらしく感望に『若狭仁医』とあるものすべて真蹟ではない。これに反し書状は偽物が一点もなく、玄白の筆蹟と筆勢は力強くて一種独特の癖があるのですぐ鑑定できる。

本項の末に模写の類の肖像を便宜附録しておいた。



1 建部清庵肖像贊

絹本着彩、長二尺三寸一分幅九寸二分。奥州一關藩医、建部清庵元策の肖像画（筆者不詳、後考を俟つ）で上部に清庵六七才の自賛と玄白四六才の時の贊が記されている。すでに安永二年（一七七三）以来、文通によつて結ばれた兩人は一度も相見ることなくて莫逆の友となつていた。オランダ



医学の真髓を知つた清庵はもはや老年のため蘭学志望を中止し、代りに五男亮策（のち玄白の長女扇と結婚して杉田家をついだ伯元）と門人の大槻子煥（のち玄沢と称す）とを江戸に送り玄白の門に入れた。この肖像画は玄沢入門の時に清庵から託されたもので、玄白はその志を賞して喜んで贊を加えた。時に玄白四六才。現存する玄白の筆蹟としてはもつとも若書に属する。清庵はこれから五年後の天明二年（一七八二）七二才で歿した。大槻家伝来の肖像画で現在は早稲田大学図書館の所有に帰している。贊文の釈

文は左の通りである。

（建部清庵自賛）  
病入口禍出口、慎之々々  
安永七季春 六十七翁書（元策）  
（杉田玄白賛）

東奥清庵先生謬見称知己。  
往復有年于兹。雖然千里隔



玄白の印は感望が『鶴齋』落款は上が陽文で『酒井家臣』下は陰文で『杉田翼』とある。

## 2 平賀權太夫宛書状

折紙、縦一尺三寸横一尺七寸。天明元年（一七八一）に讃岐の平賀源内の遺族に宛てた玄白四九才の時の書状である。玄白は源内と親交あり、安永八年（一七七九）その獄中で病死するや玄白は彼のために碑文を撰して石に刻したが、罪人のこととて許されなかつた。この書状は恐らく平賀源内の三周忌に当り、江戸在住の旧友たちの計画を報じたものと思われ、形見の「紅毛本草」のことを謝し、源内に同志らが建碑しようと考えていることなどが記されている。宛名の平賀權太夫は源内の妹りよの婿養子である。原本は讃岐の平賀家の有。かつて昭和十九年に杉田六蔵氏が原寸大にオフセット版で複製し知友に頒たれた。全文は左の通り。句読は新たに加えた。

三月廿六日之御報。此節相<sub>レ</sub>達致拜見候。時分柄暑氣<sub>レ</sub>相成候所、被成御癒御平安<sub>レ</sub>被成御暮候由、珍重奉存候。随て私義<sub>レ</sub>罷過候間、乍慮外尚々心易思食<sub>レ</sub>可被下候。先達て御出府之節者<sub>レ</sub>御旅館エ御尋申上候所、無程御帰<sub>レ</sub>国被成候。厥己後御尋も可被下候処、<sub>レ</sub>何角

御多用被成御坐候。思召候様にも<sub>レ</sub>相成不申候由、御尤至極、御互に遠<sub>レ</sub>国之義、存候様難參為<sub>レ</sub>。□<sub>レ</sub>御同苗様御小祥忌之節も<sub>レ</sub>朋友共申合、御法会等も相營<sub>レ</sub>申候に付、段々被入心候。御愁状共<sub>レ</sub>汗顔仕候。切々、何ケニ付存出候事<sub>レ</sub>区々御坐候。兼々御存生之内、鎌倉<sub>レ</sub>近所に金沢と申候所、風色奇絶<sub>レ</sub>之地御坐候。右之処へ御隠居被<sub>レ</sub>成御望御坐候。能見堂と申は<sub>レ</sub>中にも宜地に御坐候故、何卒右之<sub>レ</sub>（以下折紙裏面）土地へ碑文にても相認、不朽にいたし<sub>レ</sub>申度、心懸罷存候。是非相斗可<sub>レ</sub>申候。且又、御尊母様にも旧臘御遠<sub>レ</sub>行被成候由、切々驚入候御義奉<sub>レ</sub>存候。御力落御察候。彼是存合<sub>レ</sub>申候所、御年齢は七旬余にも可被相成候哉と奉存候。如何に申事御坐候得共、御年に<sub>レ</sub>御不足は無御坐候得共、近年之御不幸<sub>レ</sub>氣之毒至極奉存候。將又紅毛本草<sub>レ</sub>之事、御無心申上候所、御承知□<sub>レ</sub>□<sub>レ</sub>以忝奉存候。前以申上候道行、忘<sub>レ</sub>兄<sub>レ</sub>様<sub>レ</sub>御手馴被成候品、別て大悦奉存候。幸便次<sub>レ</sub>第金子差上せ可申候。先様へも其段<sub>レ</sub>申上候て、但返置可被下候、奉願候。右御報<sub>レ</sub>御礼旁、如此御坐候。恐惶謹言<sub>レ</sub>

杉田玄白

五月廿八日

平賀権太夫様 御報

翼(花押)

3 百 鶴 図

尚々、次第に暑相募申候間、折角く

御自愛可被候て、且拜奉

□ □ □ □ □ □

この書状に見える能見堂とは金沢八景を一望の下に見晴す高台の小堂で、源内はこの附近を晚年隠棲の地と定めていたことが判る。玄白らの建碑もついに実現せず終つたらしく、数度にわたつて能見堂附近を实地調査したが、見出すことは出来なかつた。その碑文は大槻如電著「新撰洋学年表」安永八年(一七七九)の条に見える。

絹本極彩色、長三尺五寸七分幅一尺八寸五厘。玄白は非常に多趣味の人で、詩歌俳諧戯文はもとより、絵画も善くした。この画は彼の遺品中での大作で、代表的な画である。深山幽谷に遊ぶ丹頂鶴をあらゆる姿態で描いていて、百鶴と題しているが全体で何羽いるか正確に数えられない。一羽ずつ見ると実に細かく描いてあり、聊かもゆるがせにしていない。しかも画面全体としての構図もまとまつており、科学者としての丹念な玄白の性格を如実に示している。遠近法や流水岩の描法に日本画の常識を破つているところもあるが、素人の画としては非凡である。寛政四年(一七九二)の還暦に当り子孫のために残すという意味の賛が加えられている。

寛政壬子六十初度日

製百鶴図与児孫 鷗斎

印章は感望を欠き落款のみで二顆、上は陽文の丸印で『翼』、下は陰文角印で『小詩儂堂主人』とある。故杉田鶴子博士所蔵、現在は杉田秀男氏が保管している。従来未公開のもの。

御手数ながらこの頁に添附の  
百鶴図原色版を切り抜いて貼  
つて下さい。この原色版は今  
回始めて公開されるもので、  
バイエル薬品部の御好意によ  
り製版したものです

4 西洋医術之要

紙本墨書、原裝。長三尺八分、幅八寸九分。文化六年（一八〇九）四月、玄白が喜寿の日に揮毫した半折の幅物。末に『生来二万七千二百十五日之翁』と日数で計算してあるのも興をそそる。玄白得意の表現である。西洋医術の特色を漢文で記したもので、玄白の医学観を知ることが出来る。彼の壮年期の医学観を記した「和蘭医事問答」な

どと比較する時、円熟した老境の思想が示されている。当時欧州を風靡していた生気論の影響が強く反映しているのを見逃すことは出来ない。玄白の遺墨中、幅物としてはまれに見る長文で、もと呉家に伝来したもの。現在は石原明の所蔵に帰している。玄白の七十代の筆蹟のつけ石として重要なものである。印章は感望が『不知老之将至』、落款は上二顆とも陰文で上が『医翼』、中は『子鳳』、下は陽文で『一字玄白』とある。

而洋之術醫其例也化故也在審知人體人於體百骸九竅脈腑筋脈各有陰陽以掌其官矣而核算之度各不自然也亦任其自生焉若起居動靜一有不任自然者則微聞為滯積結為邪為微為痛為虛為耗至以成病是以施治之道去後其自外而求其差譬之自鳴鐘核算有差若外器不成其用又孰能其機測之彼非熱也其義則病乃由得統治故務以此為之又以中為要

文化己巳四月

喜来二万七千二百六十一日

玄白



(西洋医術之要訳文)

西洋の医たるや、その術他に故なきなり。審かに人体を知るにあり。人の体におけるや、百骸九竅、臟腑筋脉、おのおの機関ありてもつてその官を掌る。機関の發するや、自然ならざるはなきなり。故にその自然に任する者は、病のよりて生ずることなし。もし起居動靜一に自然に任せざる者あれば、機関これがために滞り鬱結して、邪となり、毒となり、微となり、瘍となり、耗となり、以て病をなすに至る。是を以て治を施すの道は、その自然にしてすこしの差なきに復するにあり。これを譬うるに、自鳴鐘の機関にすこしの差あれば、器はその用をなさず、人体の用と機関の發するとは、その義を熟知するに非れば、則ち病は何によりてか治を施すことを得んや。故に努めてこれを以て先となし、またこれを以て要となす。

文化己巳四月

生来二万七千二百十六  
日之翁 鷗斎

5 自賛 自画像

絹本淡彩、長二尺五寸六分幅八寸九分五厘。文化八年(一八一)玄白七九才の画で、俗謡を歌いながら踊つた夢をみて、その姿を写しとつた旨の自賛がある。戯画風の筆致と設色は必ずしも名作と称し難いが、軽妙洒脱、賛文と相俟つて玄白の滑稽味と多趣味ぶりが溢れている。現存する玄白の画は、この自画像と前掲「百鶴図」の二点しかないが、かの謹嚴精密なる大幅の「百鶴図」に比し、これはまた淡彩の草画で、素人の余技とは思えないほど変化に



富む技倆である。玄白が絵筆をとつたのは恐らく青年時代からと思われるが、誰について学んだかはよく判らない。

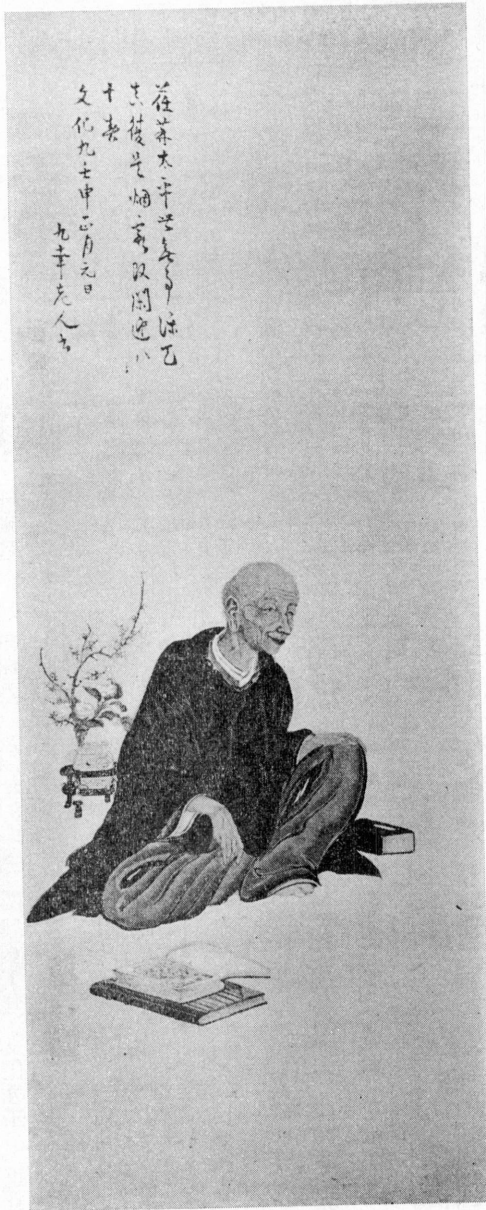
「蘭学事始」の記載によると、平賀源内と親交があつたというし、「杉田家略譜」（大槻玄沢編）によると廿五才の時に日本橋通四丁目に借家して開業（廿八才まで此地におり、火災にかかり移転）した際、隣家に有名な宋紫石が住んでいたという。楠本雪溪（流布本に雲溪と記すは誤）は長崎に遊んで沈南蘋の風を学び、帰府して宋紫石と称した新しい画風の画家であつた。平賀源内の著「物類品隨」の画も彼の筆である。こんな関係で玄白の画風は多分に写実的な沈南蘋と、源内を通じての洋画の影響をうけたことであらうと考えられる。賛は『偽の世にかりの契りとしながら、ほんじやと云ふにだまされた。こゝは狐の宿かひな。コン／＼。文化八のとし此今様をうたひ躍りたりとゆめみし姿のうつし絵。明年八十翁、九幸老人』とあり、印章は落款一顆のみで陰文で『小詩僊堂主人』とある。大槻家伝来、早稲田大学図書館現蔵。

## 6 石川大浪筆肖像自賛

絹本極彩、長二尺三寸幅九寸二分。洋画家石川大浪が描いた八十才の寿像に自賛している。賛に『荏苒太平世、無事保天真、復是烟霞改、閑迎八十春。文化九壬申正月元日 九幸老人書』とあり、文化八年（一八一）秋に石川大浪が描いた肖像に、八十才の元旦に当り玄白自ら賛を加えた幅である。初めから寿像として製作したので背後に梅花一枝を配しており、玄白は被風を着して左膝を立てて思案の体、左手に帙入の線装本、右前に蘭書二冊を重ね、上の一冊は扉絵が開けてある。晩年の玄白の面影を写して真に迫り、日本画の材料を用いながら、描法に西洋画法を取り入れ濃い彩色で描いている。玄白の肖像としてもつとも重視すべき遺品といえよう。この二年前すなわち文化七年（一八一〇）にも、石川大浪は七八才の玄白の肖像を描いており、原本は伝わらないが、同年出版の「形影夜話」の巻頭に木版画で掲げられている。もと大槻家伝来、早稲田大学図書館現蔵。肖像だけは昭和三十一年三月発行の「医学のあゆみ」第二一巻第三号の表紙として、原色版で緒方富雄氏により複製された。

筆者の石川大浪（一七六一—一八一七）は、通称七左衛門、名は乗加また甲吉、一に薫松軒と号す。幕府直参の大番与力で、絵を善くした。大浪の号はマテオ・リッチの「万国輿図」にアフリカ喜望峯の近くに大浪とあるよりと

芳」と「薦録」の挿画も、大浪の筆であり、別に狩野探幽の絵を模写して上木した享和三年（一八〇三）刊の「聚珍画帖」という画集もある。洋画を知るために蘭学に入つたらしく、前野良沢の著「仁言私説」を筆記して世に伝えた



り、オランダ名を Tabel Berg と称しているのは、同じくケープタウン近傍のテーブル山をもじつたものといわれている。初期洋画家として著名であるが、遺作は少く、玄白肖像は中でも代表作に数えられる。大槻玄沢の「蘭腕摘

のも大浪の功である。玄白とは蘭学の上での友人であつたと思われ、当時としては異色を放つた画家であつた。



7 玄白いましめの文

巻紙一通、長四尺二寸四分高四寸六分。玄白が親しい弟子（宛名不詳）にあてて贈物を謝し、併せて治療の要旨を料理にたとえてねんごろに諭した長文の書状。『玄白いましめの文』と称し著名の筆蹟である。日附の四月廿五日は内部徴証により、文化十三年（一八一六）であることが知られるから、玄白の死のちようど一年前、八四才の筆である。この書状の末尾に、『老年で根気がなくなつたからこの書状を三度に分けて書いた。さぞかし前後しているであろうから、よろしく判読してくれるように』との意味の言葉が記してある。筆勢と墨色からみると、たしかに三回に書きついである。それにもかかわらず四尺に余る長文の中に、あくまで治療の秘訣をさとしてゐる態度に玄白の人格が滲みでてゐる。呉家伝来、石原明現蔵。玄白の筆蹟はこれ以後、大槻玄沢六十賀の寿歌と書状のみより現存しない。全文左の通り、句読を新たに加え、行の切れ目をしで示した。

君侯御参府に付、久々にて御安否承知致し大慶侯。

其地如何候哉、江戸表当年は今以、天氣不揃にて寒

暖」相定不申侯。弥御安清」御精勤之旨承知、扱々」致大悦侯。老拙事も依」旧罷在候得共、何を申候も」及高年侯故、至て衰」老万懶惰相成候て、」万方御疎遠申侯。夫故」其辺へも御無沙汰申候段、」及赤面候。此度不存」寄、問安方勤番被仰」付候よしにて 致対面、」扱々致大慶侯。同人事も」前方と違、才氣も少は」開侯様子、先御用にも相立」被申勤番相勤候事、於」老拙如何斗難有奉」存侯。貴弟には只今者、」殊外閑候勤之由、何よりく、」目出度御事御坐侯。其所等」医事之面白最中に御坐候も、」何分御出精可被成侯。老拙」旧来致療治、色々工夫」も凝し候得共、兎角多く」病人を手懸候内には、自」然と古人未發之所も」合点参り候者に御坐侯。さて」料理之始成ものは、誰々も」酢、醬油、酒、塩之外」入用之者は無御坐候得共、其」塩梅斗にては、能も悪も」相成申侯。医事も如其、」数年経候内には自然と致翫熟申候方は、如酢」醬油、療治は塩梅にて」御坐侯。申迄無御坐候得共、」其所御工夫第一と奉存侯。」扱々無益之事斗にて、感」心御礼不申入候。何よりも」御国産紙被懸貴意」扱々忝、先達ても行燈」紙被懸貴意、毎度く」遠方御心配不浅奉存侯。」何も重宝之品、如

何」斗大慶侯。右御礼」御報旁如此に御坐侯。此書」状  
三度に相認、嘸致」前後可申侯。宜御照察」可下侯。子  
供初一統宜」得貴意侯。恐惶謹言」

杉田玄白

四月廿五日

尚々、次第に夏色」相催侯。折角御自愛可被」成侯。

問安方義、縷々被仰」下相趣承知、將種家絶」之由驚人  
侯。何卒再興」名家も能立侯如祈申侯。随分」御紙上之  
趣は致承知侯。燈」下老筆、宜御覧可被下侯。

(宛名欠)

## 8 大槻玄沢宛寿歌並書状

文化十三年(一八一六)九月、玄白八四才の秋の筆蹟  
で、門人の大槻玄沢の還暦祝賀に祝いの品に添えた書状と  
寿歌懷紙である。玄白最晩年の絶筆で、こののち約半年た  
つた文化十四年(一八一七)四月十七日に八五才の光輝あ  
る生涯を閉じた。寿歌は赤い懷紙(長一尺幅一尺七寸九  
分)に『大槻六十の賀に きみがよはひ 蝦夷の千嶋の  
白真砂 つきせぬ数の朝 とぞ知る 八十四翁九幸』と記  
され、これに寿衣として鶴の毛衣および寿如意の三品をそ  
るえて左の書状をおくつた。

先日者乍早々、得貴」意侯。爾後御安清と」奉賀侯。

然ば当月」末は御年賀御祝之由、」愛度奉存侯。仍て拙」

詠一首、千年までもと鶴の毛衣一ツ、万事」如意と相

添、三種致」進上侯。老人志斗に御坐侯。余面上可得」

貴意侯。頓首

九月十三日

大槻玄沢様

杉田玄白

これによると玄白八四才の誕生日の筆である。大槻家伝  
来、早稲田大学図書館現蔵。



## 附1 帰一作木彫肖像

玄白が日本橋で開業していた頃、帰一という彫刻師が治療の謝礼に作つて玄白におくつたもの。原像は永く杉田家にあり、顕療靈神と称して神棚に祀られていたが、大正大震災の時横浜真砂町の杉田盛氏宅で焼失した。原像は高さ約一尺。焼失前の写真は正面から写したものの、複写が杉田浜男氏のもとにあり、かつて米人ホイットニーの「日本医学發達史」の口絵に石版で掲載され（一九〇五）、右向きの写真は藤浪剛一氏が旧蔵され、同氏著「医家先哲肖像集」に収められている。この二点が原像のおもかげを伝える唯一のもので、壮年時代の玄白の姿を知る貴重な肖像である。

## 附2 復原像

帰一作の原像の焼失を惜しみ、写真によつて復原した木像が二体ある。一は藤浪剛一氏が橋本高昇氏に嘱して原像の約倍大に模刻したもの（中泉行正氏現蔵）。二は呉秀三氏が中村七十氏に依頼して原像の写真から模刻したもの

（茅原元一郎氏現蔵）で、ありし日の原像を偲ぶよすがともなる。

## 附3 渡辺華山筆玄白肖像

渡辺華山が石川大浪の描いた玄白肖像を写したものがあつたが、現在止むを得ない事情（旧横浜正金銀行寄託のため）で見ることができない。この模写は後方の花瓶がなく衣服が異り容貌も大浪の画より俊厳である。華山筆の原画をさらに模した絵もあり（「江戸時代の科学」収載の筆者不明と称する藤浪剛一氏旧蔵の画）、大浪筆の玄白像がその後の蘭学者に、開祖の像として弘く写されていたことが推察される。

## 附4 井上自助筆玄白肖像

洋画家井上自助画伯が帰一作の木像の写真によつて油絵に描いたもの。昭和初年の作でいま慈恵医大に所蔵されている。現代のものであるが参考として加えた。このほか現代画家で玄白の姿を描いたものには、長谷川路可画伯のものもある。

### (三) 関係文献

#### 1 ワルエルダ解剖書

「解体新書」の反訳に至るまで、杉田玄白に直接大きな影響を与えた文献を「蘭学事始」の記載から年代の順に拾つてみると、「檜林家金瘡書」「ターヘル・アナトミア」「和蘭文学略考」「ヘイステル外科書」「蔵志」「紅毛談」それに「和蘭訳筈」の七部を拾い出すことができる。「解体新書」に掲げられた参考書については、すでに岩熊哲氏

Juan Valverde de Hamsco の作った銅版図入り解剖書は、その頃歐洲で広く行われ、一六四七年にアムステルダムで増訂版がオランダ語で出版された。これが玄白の手に入り、「解体新書」の扉絵に用いられている。詳しくは「医学のあゆみ」第十八巻第三号大島蘭三郎氏の論文にあり。

の名著があつて、詳かであるからほぼこれに譲つて省略し、ここではおもな関係文献（「解体新書」の改訳と目すべき玄沢の「重訂解体新書」を含めて）のいくつかを解題する。

「檜林家金瘡書」とは恐らく檜林鎮山がアンブローアス・パレの著書の蘭訳本を抄訳した「紅夷外科宗伝」であり、青木昆陽から伝えられたという「訳語」という冊子は、「和蘭文字略考」と同類のものと思われる（「和蘭訳語」と題する文献は不伝）ので、ここではその推察による文献をとつた。



## 2 紅夷外科宗伝

六卷、未刊写本。本書はルネッサンス時代の名医で近世外科学の祖たるアンブロアス・パレの著書を、カロール・バツスが蘭訳した *De Chirurgie ende Opera van alle de Werken*. 1649. を長崎の檜林鎮山（一六四八—一七一）が抄訳したもので、仕掛書・金瘡書・金瘡跌撲図・油之書・油取様書・膏藥書の六部より成る。また別々に単行本としても伝写された。このうち玄白に直接影響を与えたのは「金瘡書」で、始めて『セイヌン』（オランダ語 *Zenuw* の転訛、神経と玄白が邦訳した原語）の記載が見られる。西玄哲が享保二十年（一七三五）に校訂した「金瘡跌撲療治書」（写本）や、伊良子光顕が明和六年（一七六九）に刊行した「外科訓蒙図彙」は、ともに本書をさらに重抄して文章を整えたものである。本書はいわゆる南蛮流外科の基本文献の一つで、キリシタン医学の名残がかそげくも生命を維持し、玄白に至つて本格的西洋医学の紹介の動機を与えたかけ橋的存在として重要な文献である。

## 3 ターヘル・アナトミア

ドイツ、ダンチツヒの解剖学者 *Johan A. Kulmus* の解剖学教科書は、手頃な入門書として十八世紀に広く読まれ、各国語に訳された。国内現存のものを年代順に列挙すべし。

1. *Tabulae anatomicae*. 1732
2. *Anatomische Tabellen*. 1732
3. *Ontleedkundige Tafelen*. 1734 (Dieten)
4. *Tables anatomiques*. 1734 (Massuet)
5. *Tabulae anatomicae*. 1744

このほかキユーン改訂版もある。初版は一七三二年のラテン語版で、同年にドイツ語版が出版され、ついで蘭訳、仏訳が出現（前掲カツコ内は訳者）、さらに二冊に分けたラテン語版が重刊された。クルムスの原稿は初版の *D. Gedani* の序より、一七三〇年には脱稿されたと思われる。「解体新書」のもとになった本は3の蘭訳本で、わが国では「ターヘル・アナトミア」の通称で知られていた。玄白入手のいきさつは「蘭学事始」に詳しい。

#### 4 和蘭文字略考

三卷一冊、自筆稿本。現存するものは青木昆陽自筆の再修本で、延享三年（一七四六）十一月に書かれたものである。これ以前に長崎留学から帰府した直後まとめたものは副本を家に留め、清書したものを官に献じたが、延享三年春の火災で副本を失つてしまった。

そこでメモを集め記憶をたよりに再修したので献上本とは異なる旨の自序がある。献上本は現存しない。第一卷にはアルファベットの三体を記し、ローマ数字とアラビア数字を挙げ、片仮名で発音を注記、次に綴字の概略を説く。第二・三卷は単語集で、七百余語を筆記体横文字で記し、発音を振仮名し漢字の訳語をそえ、朱線で音節を示してある。本書は伝写本も頗る稀であるが、幸いに自筆稿本が大槻家に伝来し、いま静嘉堂文庫に秘蔵されている。玄白らは本書及び昆陽の「和蘭文訳」（残本五冊現存、短文及び単語集）などで、始めてオランダ語を前野良沢から学んだのである。本書は大正六年に珍書同好会から謄写版で復刻されたほか、流布本はない。



「解体新書」は一面から考えるとこのクルムスの解剖学教科書の日本語版ともいうことができる。（但し、本文だけで、脚註を含めた完訳は大槻玄沢の手で完成された）。

前掲、国内現存のうち1は中村拓氏所蔵、2以下は藤浪剛一氏旧蔵、大島蘭三郎氏現蔵。また3は東大図書館・天理図書館・藤井尚久氏の所蔵も知られ、キューン改訂版は内山孝一氏ほか数本の所蔵がある。

一巻並附録とも二巻二冊、宝暦九年（一七五九）刊。京都の医官、山脇東洋が宝暦四年（一七五四）閏二月七日に所司代酒井楽山侯の許可を得て、同志数人と共に京都西郊の刑場において解剖を観察した記事と、門人浅沼佐盈（円山応挙に画技を学ぶ）が描いた解剖図を木版としたもの。図は手彩色を施し、また東洋の文十数篇を附録して二巻にしてある。「蔵志」本文は解剖観察の直後に成つた（自筆稿本は藤浪剛一氏旧蔵、石原明現蔵）が、公刊は五年後で文にかなりの出入がある。わが国最初の解剖観察記録で、実証的医学の基本史料である。玄白はこの解剖に立会つた同藩の小杉玄適から、すぐ詳細を聞いた。そしてこれが動機となり、自分も解剖をみて永年の疑問を解決したい欲望をもち、後年ついに千住骨ヶ原で観察して蘭書反訳を思い立つた次第は「蘭学事始」に詳しい。玄白に直接影響を与えた文献として第一に挙ぐべきものである。全文は読下しとして三枝博音氏により「日本科学古典全書」医学篇に改められている。

小本二巻二冊、明和二年（一七六五）刊。本草家後藤梨春が著わした隨筆。当時漸く好事家の増加したオランダ好みに応じて、オランダに関するいろいろな風聞や珍奇な器物などを解説した書であるが、中にオランダ文字としてアルファベットを掲げてあることが問題となり、禁にふれて絶版となつた。また著者の梨春は閉門を命ぜられた。キリシタン禁制の建前からアルファベットを手がかりに洋書を読むようになつては大変との町奉行当局者たちの見解によつたものであるが、何ら書中には有害な記事は見出されない。玄白らが「解体新書」公刊に際し、最も心痛の種となつた絶版の前例である。「新書」の公刊は本書に後れること九年、すでその前年には既述のごとく、反響をみるため「約図」を公けにしている。本書の書名はオランダバナシと読むのが正しい。

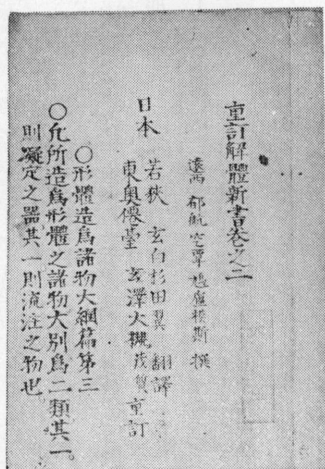


## 7 和蘭訳筌

写本一冊。前野良沢著。現存テキストは土浦の蘭学者山村才助が写した増訂本ただ一部のみで、呉秀三氏旧蔵(石原明現蔵)のほか伝本がない。自序によると始め「蘭訳筌」と題し、オランダ語の単語若干を集め、傍らに発音と訳を注記し初学に使した書を作つたが、これでは全く日本語に心がとらわれて真に蘭文を読むことができない。よつて蘭文を主とし解説だけを国文で記し、本末二編として改めて「和蘭訳筌」と称するといつている。序の成つたのは天明五年(一七八五)秋である。増訂本は従つて単語集ではなく、発音と綴字の概説で末に和歌をオランダ字で書し、また蘭書のタイトルなど短文数条を掲げてある。玄白らが授つた「蘭訳筌」はこの増訂本ではない。初稿本はいま伝わっていないが、恐らく昆陽に蘭語を学んだ頃の手控えを整理したもので「和蘭文字略考」と同類のものであつたと想像される。初稿の著作年代は明和五年(一七六六)頃であらう。

## 8 重訂解体新書稿本

大槻玄沢自筆稿本、現存九冊。ほかに図編版下一冊(南小椿寧一筆)。大槻家伝来、早稲田大学図書館現蔵。「解体新書」は玄白個人の考えにより、不十分な訳と知りつつも、一日も早く真の医学を世の中に紹介しようとする意図のもとに、原書の脚註はすべて省き、本文だけを漢訳して刊行したのであつた。その後玄白はさらに完全な訳を公けにしたいと念願していたところ、安永七年(一七八八)に大槻玄沢が門人になつた。玄沢の驚くべきオランダ語の上達ぶりに、玄白はかねての素志を彼に托し、「ターヘル・アナトミア」と「ヘイステル外科書」の完訳を命じたので



ある。玄沢は他書を参照してかなり正しい訳に直し、脚註までとつて全十冊となし、寛政十年（一七九八）には一応脱稿した。さらに図編を淀藩医官の南小柿寧一に依頼して模写させ出版の態勢を整えた。その原稿がいま伝わっている本書で、惜しいことに第一冊を欠き、玄沢自筆の本文が九冊、南小柿寧一の清書した図編一冊が残されている。稿本は貼紙や書入れの訂正が多く、後述の版本と比較すると編成や順序に差異多く、版下成立前のもとの姿を留め、玄沢の苦心の跡がよく示されている。もと越後の門人が貰いうけて秘蔵していたものであるが、のちに再び大槻家に返された。

図編は袋綴で本文と同じ装訂。版心にも図編と記されているので、始めは玄白の「解体新書」の図と同様、袋綴で出版するつもりであつたらしい。玄沢の筆で説明の訂正や製版の指図書がついている。公刊に当り「鳩盧莫斯解体譜」と改題され、銅版刷を貼り込んだ帖仕立にされた。

## 9 重訂解体新書

全十三冊、文政九年（一八二六）刊。内容は序例一冊。本文四冊、名義解六冊、附録二冊で、後述の銅版解剖図一帖を附す。原稿成立より出版まで二八年を経過している。

これはこの間、大槻玄沢は幕府に召され蘭書和解御用を仰付かつて公務繁忙であつたのと、附図を銅版にして原書近からしめんと考え直すに至り、銅版製作者の名手を求めて得られなかつたことに起因する。流布版本は表紙の色により三種類に分けられる。亀甲模様研出の緑色表紙の本は初刷で、桂川の題字やその他の題跋なく、黄色と小豆色表紙の本は再刷と三刷で題字などいくつかが刻されている。内容は同じであるが製本の際の都合とみえて、冊数の異なる原裝本もあるから、総冊数にこだわることはない。名義解と附録は玄沢の著述と認むべきもの、解剖学名の起源と変遷を知る上に重要な文献である。杉田玄白はついに重訂の出版をみずして文化十四年（一八一七）に歿した。

10 鳩盧莫斯解体譜

銅版一帖、文政九年（一八二六）刊。原図は淀藩医官南小柿寧一が文政四年に清書したもの。前述のごとく初めは図編と題し袋綴の体裁で公刊するつもりであつたらしいが、宇田川榛齋が文化五年（一八〇八）に亜欧堂田善に刻させたわが国最初の銅版解剖図「内象銅版図」を「医範提綱」の附図として公刊し、同年また二番目の銅版図が大坂で斎藤方策と中環の共訳により中屋伊三郎の彫刻した図を附した「バルヘイン解剖図（譜）」が公けになつたので、「重訂解体新書」の附図も原書と同様な精巧な銅版図に作ることになつた。しかし、名手亜欧堂田善すでになく（文政五年歿七二才）、凡庸の銅版画家では精巧な図譜を作ることができないので、適任者を探すのに骨折し結局京都の中屋伊三郎に頼むことになつた。クルムス原書の扉絵を模し全四五図を板表紙をつけ帖仕立とした。わが国三番目の銅版解剖図で、美術史上からも重要な作品とされている。原図を描いた寧一は銅版図の完成を見ずして死んだ。

(四) 関係史料

1 芝蘭堂新元会図

紙本淡彩、本紙長三尺三寸幅四尺一寸八分。寛政六年閏十一月十一日は太陽暦の一七九五年一月一日に当るので、大槻玄沢が主唱して、築地備前橋向いの中通りにあつた家塾芝蘭堂に、蘭学の同志を集めてオランダ正月と称して嘉宴を張つた。のちこれが例となり、玄沢の長子玄幹の死ぬ天保八年（一八三七）まで四四回開かれた。本図はその第一回の会合の模様を伊勢の市川岳山が描き、各人が賛をしたもの。大槻家伝来の有名な幅で現在は早稲田大学図書館の所有になつている。明治六年（一八七三）玄沢の次男磐溪が、長く中絶していた新元会の最後をつける意味で、各家の子孫を招いた時にこの幅は再び床に飾られた。現在の表装はこの時のもので、本図の上に玄沢絶筆の詩稿と磐溪が新元会を復興した顛末を記した一文とが合装されている。その後少し縮写して石版で唐紙に刷つたものが大槻家から頒たれ、また「磐水存響」にもかなり大きな写真が入れられ、著名な絵であるが原色複製はなかつた。今回始めて本図のみを複製したものである。この中に玄白はいないが、交友や門人関係を知る史料として極めて重要である。

この頁に添附の寛政新元会図の複製を適当に貼つて下さい。この複製はこのたび初めて原色版として公開するものでバイエル菜品部の御好意により作製したものです。

## 2 蘭学者番附(二種)

近年発見された新史料で、津山藩主松平確堂旧蔵の「芸海余波」と題する貼込帖の中にある筆写で、詳細は岡村千曳著「紅毛文化史話」に研究と紹介が収めてある。玄白に關係あるものは左の二種である。

### A 相撲見立番附

縦一尺三寸四分横一尺強、一枚。勘亭流の書体で相撲番附の体裁で書かれ、中央の欄には『蒙御余沢』と大書しその下に五行に分けて『皇朝寛政戊午歳十一月二十六日、大西洋壺千七百九十有八年ニニューエヤールダク嘉宴於櫛陰芝蘭堂、社中会集蘭学花相撲取合興行仕候』とあり、次に立行司福知山侯を中心に十名が行司として記され、次に年寄として前野良沢と杉田玄白が列び最下段は勸進元大槻玄沢、差添桂川甫周となつてゐる。東西に張出力士があり東は星野良悦、西は檜林重兵衛で、この二人は寛政十年の新元会の招待客である。力士は東西四段に分れ、すべて六四人。全国に亘る有数の蘭学者を集めてゐる。この番附は寛政十年(一七九九)の第五回新元会の時に作られたものの写しで相撲番附に擬してはいるが、当時の蘭学者の顔ぶ

れと地位を知る貴重な史料である。

### B 芝居見立番附

三枚続き、長一尺九寸高八寸三分に写されている。始めに紋番附があり、ついで『近来繁榮蘭学會我』と勘亭流で外題を大書し、四番続の世話狂言に仕組んだ役者見立が細かく書いてあり、末尾の狂言作者の段に前野良助を立作者、杉田玄八を二枚目に位付し、『寛政八丙辰年正月二十日ヨリ』とあつて、この日を初日に興行の態にしてあるから、寛政八年(一七九六)の第三回新元会の座興と思われる。四番仕立の趣向を記したところに三番までは、『新井に草創、青木に萌興、前野に休明』とあつて、最後に玄白のことを次のように記している。『第四、此学をおし出し唐人迄も胆玉にこたえさせたは此人の気量にて、杉田に隆盛』

この年玄白は六四才、良沢は七四才であつた。また、この正月の江戸堺町都座(中村座)での初狂言は、初代桜田治助作の『振分髪青柳會我』であつたから、これに擬して作つたもので、この番附作者は蘭学者中きつての戯作者たる森島中良の手に成つたものであらうと推定される。

### 3 前野良沢自賛自画像

前野良沢自筆。舶来洋紙に毛筆で略画風に描いた自画像に自賛を加えてあるが、署名や落款はない。腕をまくつて手に筆をもち、前に硝子器具らしきもの二個と包帯が置いてある。総髪を無雑作に束ね、得意然とした表情であるが『経営漫りに費やす人間の力、大業は全く造化の功に依る』と上部に漢文の対句が賛してある。奇行を以て知られた篤学者の面目躍如たるものがあり、賛によつてその心構えと謙虚な性格が察せられる。良沢は水墨の略画をよくし、本図のほか竹の絵（富士川游氏旧蔵）も残っていた。この自画像には大槻磐溪の添書があつて伝来を記している。それによると、明治九年（一八七六）九月二十八日日本郷の大槻邸で父玄沢の五四回忌の法要を営んだ。その時、旧門人や交友の子孫はみな列席したが、ただ前野家からは誰も見えなかつた。そこで桂川家の人が残念がつて同家に伝わるこの自画像を大槻家に贈つた。今は同家から早稲田大学図書館に所蔵が移つている。本図実物からの写真は、「医学に関する古美術聚英」に収めてある。

### 4 大槻玄沢添書

文政八年（一八二五）十月下旬に大槻玄沢が師の杉田玄白自筆の著書を写しとつた際に記したもの。この玄白の著書がどんなものであつたかは明かでないが、添書の内部徴証から玄白の一種の回顧的隨筆であつたことが知られる。あるいはかの「蘭学事始」の基礎をなすものであつたかも知れない。蘭学創始者たる玄白の文と筆蹟は、当時すでに門人たちにとつても重要な記録として崇ばれていたことが偲ばれる。全文は

——昔、老師等物語れしことの正証を得て、益欽慕に堪へ、いよいよその病発よりも、受得し天然を養われしことは、この書中に著しるし。されば我邦医流起りし後の一大名家たるを、くれぐれも仰ぐべく貴むべし。文政八年乙酉の仲秋の末、先生の肉筆を写し留るそのはじめに  
はし書しぬ。六十九翁磐水（花押）

半紙半折に七行に書いてある。大槻家伝来、石原明現蔵。全文は凸版に縮写して「医学のあゆみ」第二三卷第三号の「名医の筆あと」欄に発表してある。

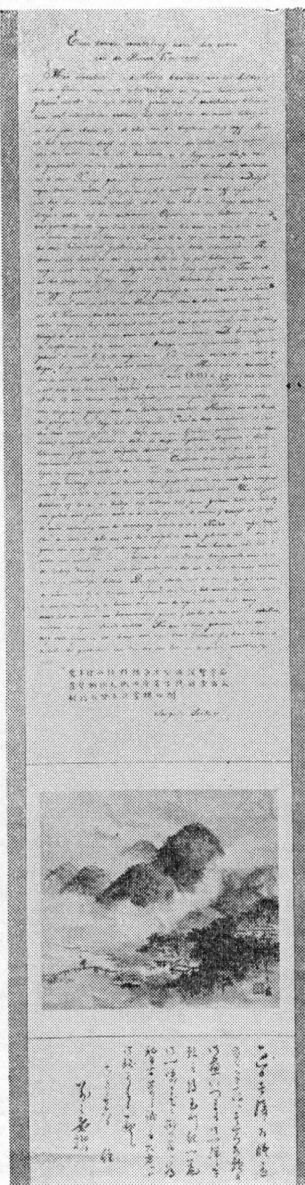
5 蘭文玉川紀行

紙本墨書、立軸一幅。杉田成卿自筆蘭文に開成所教師の水墨画と、これに関係ある成卿の書状の三点を一幅に仕立てある。「玉川紀行」には二種あり、ともに古くから日本人の作つた代表的なオランダ語の名文として知られている。第一回は安政四年（一八五七）七月十一日、成卿が遠

祖の墓参をかねて玉川に遊ばん

と、当時住んでいた羽沢村（現東京都渋谷区羽沢町）を徒歩で出発、二子の渡しをこえたが、時間の都合で墓参を中止し、舟で玉川を下つて六郷から駕籠で帰宅した。第二回は同月二十二日、前回と同じコースを駕籠で行き、二子の渡しから溝ノ口を過ぎ蔵敷の長安寺に詣で帰つた。その二回の紀行を別々に蘭文でまとめたもので、第二回のもので

清書したのがこの軸である。漢詩が左横書に記されているのも興があり、本文三七行目以下に長安寺にある慶長十七年（一六一二）の銘ある遠祖の墓前で、感慨にふけた由が記されている。時に成卿四一才。安政二年（一八五五）の大地震に罹災した成卿は、その後羽沢村に仮寓して公務から離れていた時の余技で、自筆は最近の発見に係る。蘭文本紙長二尺七寸七分幅一尺。緒方富雄氏所蔵。他に従来



知られて  
いる  
高雲  
外の  
写本  
が現

存する。全文及び訳文は緒方富雄氏により「中外医事新報」第一一八二号に掲載され、さらに同氏著「蘭学のころ」にも収められている。

## 6 杉田家略系並由緒書

写本一冊。文化八年（一八一二）撰。若狭小浜藩士が各自の家の記録を藩に提出した書類の写しで、杉田家の分は江戸のスの部に入っている。杉田家の家系や相続関係を知る根本史料で、原本は藩主の酒井家所蔵。全部の写本は早稲田大学図書館にあり、杉田家の分だけの写しは大槻家伝来本が同館に存し、抜書は杉田家にあつたが戦災で失われた。その写しは後述の年譜の末にも合綴されている。文化八年五月に作成して藩に届け出たもので、差出人は当主の杉田伯元、四九才の時に当り、玄白はこの年七九才であつた。本書は杉田家の根本史料であるので今までも諸書に引用されているが、未だ全文は一般に知られていない。

## 7 杉田家記

写本一冊。杉田玄端・武自筆稿本。本書は杉田宗家に伝来する記録で、今まで全く公開されず、研究者も一人として見たことのない貴重な記録である。前半部すなわち、先祖間宮氏が杉田と名乗る頃から玄端までを玄端自身が記し、そのあとおよび脱漏を武が書継いで明治中期におよんでいる。玄端在世当時の諸記録を抜鈔してある上に杉田一族の生歿年、関係、出自、法名など詳記してあつて、本書以外には全く不明の記載が多い。玄白の兄姉、継母なども本書によつて始めて明かになつた。また杉田家墓地の見取図も貴重で、現在の栄閑院は墓地整理によつて全く旧態を失っているから、改葬前の杉田家墓地を知るために唯一の史料である。外聞を憚る記載が多いため、宗家のほか分家の人たちも見ることがなかつた。今回とくに当主杉田松夫氏の英断により初公開されたことは、学界の慶事である。内容は分類して玄白年譜と家系の項に記述しておいた。本書の出現により年譜と家系の決定版ができたわけである。



## 8 杉田家譜

写本一卷、江戸末期写本書継。この系譜は玄白の祖父、初代甫仙の兄、伝左衛門の子孫、すなわち杉田家本系たる藏敷の杉田家に伝わる史料であるが、江戸末期に杉田玄端の家の記録を抜書したものに明治末年までの主要事項を書きついでもので、いわば作つた系譜であつて杉田本系の記載はほとんどない、大体はかの「杉田家由緒書」に似ており、藏敷の杉田家の祖たる長安の父、間宮信安から筆を起し、最後は玄白贈位の記事に終る。末に初代甫仙の事蹟を玄白が藩に提出した書上の写しを附す。転写の間誤写も少くなく、朱字訂正も数個所ある。従つて史料としての価値は少いが、玄白の家系と藏敷の杉田家の関係が近年まであつたことを示すものとして興味がある。家系については別掲の系図を参照のこと。

## 9 杉田玄白先生年譜

稿本一冊、大槻如電編、自筆。明治四〇年（一九〇七）玄白九〇年忌に当り、正四位を追贈されたのを機に大槻如電が諸記録から抜萃して作成した玄白年譜の稿本。巻末には玄白の孫の成卿自筆の自身の年譜数葉と他の関係記録の写しを合綴してある。本書の内容は未公表であり、ところどころに誤謬も散見するが、玄白の生涯を知る参考資料として重要である。この記載をもとに「杉田玄白先生贈位祝賀会記事」が翌四一年印刷された。本書は明治のものであるが、玄白にゆかり深い大槻家の史料を当主自ら編した自筆稿本であるから、玄白関係史料としては最も新しいけれどもここに解題する。早稲田大学図書館所蔵。

## 10 萩原薬師像並由来記

木彫彩色薬師如来像、立像および坐像各一休、厨子入。

由来記木札一枚、同写本一通。これら一群の資料は何れも川崎市菅生町字蔵敷の杉田本系の子孫が護持するもので、もと地内の小庵に安置されていた。立像は室町期、坐像は江戸初期の作であるが、後世の修補が甚だしく、著しく原型を失つている。由来記の木札と写本は明治の作である。萩原薬師と称する由来は詳かでない。木札は表に頗る訛つた漢文で由来記が書かれ、裏に『杉田甫仙引』として片仮名混りで伝聞が記してある。ともに明治十二年（一八七九）近村東泉寺の葛山和尚の撰筆である。

本資料は玄白の祖父と父に関する唯一のもので、祖父が治療の礼として尊像を受けたものを、三三回忌に当り二代目甫仙が寺に納めたが、奇瑞によつて地内に小庵を建てて安置したことが判る。二代目甫仙は深く仏教を信じ、多くの作善をしたことは略譜にも家記にも伝えられている。

由来記は読み難い訛つた漢文であるが、参考のために少しく修正して読下しとして左に掲げる。

萩原薬師如来由来記

是の如くに聞けり。薬師如来を憶念称名する人は、百怪消え百福到り、横死を除きて安穩を得、諸願満足すと。

茲にその家地に安置する薬師如来は、古の行基菩薩の作也。先代の医生杉田甫仙、故有りて鎌倉巨福山より靈像を懇求して得たり。医業の術験を専ら江都の諸侯に施して後、旧産の地に像を置く感夢を得、悲喜告順し終に相送る。然れば近隣の群客、聾盲身疾を除かんことを祈り求む。抑々この薬師如来は昔の大願力の故に、今身は瑠璃のごとく光明廣大巍々として教化に安住す。経に曰く、わが名号を聞く者は諸の痛悩を除きて身心安樂すと。誠にこの大慈愍有難き哉。東方に向いて礼拝するなりという。

明治十二年五月八日

葛山老屈 之を記す

裏面の文はその伝聞を補つたものである。これによると初代甫仙が、鎌倉建長寺の老僧の疾を治した謝礼に貰つた行基作の像と称するも、もとより伝説で前記のごとく近世のものである。

## (五) 遺蹟

### 1 妙法寺間宮氏墓地

杉田家の遠祖すなわち宇多源氏佐々木氏流より出た間宮氏(後掲系図参照)代々の墓地であるが、小田原北条時代の墓塔は現存せず、すべて江戸初期以降の五輪塔二十数基がある。間宮林蔵・間宮士信もこの一族の後裔で、旗本直参の枯筆や鷹匠が多い。現在絶家。

旧、武蔵国久良岐郡杉田村妙法寺(日蓮宗)

現、横浜市磯子区杉田町(横浜市電杉田終点下車)

### 2 長安寺杉田氏墓地

間宮主水次郎長安は小田原北条滅亡の後、所領菅生に住み父祖の領地の名を冒して杉田姓を名乗った。文祿三年(一五九四)のことである。長安寺は彼の開基で、墓は子孫のものと離れた小丘上にあり、「蘭文玉川紀行」に見えるものが現存。しかし慶長のものではない。法名法林院釈氏浄安比丘。

旧、武蔵国橘樹郡下菅生村長安寺(真宗)

現、川崎市菅生町字蔵敷(南武線溝ノ口駅乗換柿生行バス蔵敷下車)

### 3 玄白誕生地

人も知るように玄白は享保十八年(一七三三)九月十三日、小浜藩酒井侯邸内の父の家で生れた。母はこの時難産のため死んだ。いま正しい場所は判らないが、藩邸のあとにはつきりしている。

旧、牛込矢来若狭小浜藩上屋敷

現、東京都新宿区矢来町(都電牛込北町下車、または神楽坂より大通りを西北に約五丁)

### 4 オランダ人宿舎跡

江戸参府のオランダ人一行の宿舎は本石町の長崎屋源右衛門方と定められていた。当時の模様はツェンペリーの紀行中にあり、一端は葛飾北斎の「画本東遊」にも描かれている。玄白が前野良沢につれられて、始めてオランダ人と会ったのは明和三年(一七六六)春であつた。

旧、日本橋本石町三丁目

現、東京都中央区本石町三丁目(都電新常盤橋下車、博文館のところ)

## 5 骨ヶ原刑場跡

江戸二大刑場の一つで、もと骨ヶ原と称されたが、字面を忌んで小塚原と改めた。開設以来二十数万の刑を行つたといわれ、慰霊のため回向院が建てられている。有名な玄白らの解剖観察は明和八年（一七七二）三月四日、大正十一年（一九二二）その一五〇年記念として奨進医学会の手で『観臟記念碑』が建立され、荒れてはいるが本堂裏に現存する。

旧、千住骨ヶ原（小塚原）

現、東京都荒川区南千住町五丁目（国電南千住駅下車）

## 6 ターヘル・アナトミア会説地

小塚原で観臟の翌日（明和八年三月五日）玄白らは中津藩邸内の前野良沢宅に集つて、六人で反訳に着手した。これも正確な場所は明かでないが、藩邸跡は判つている。近く仮標識設立の予定。今の聖路加病院敷地内。

旧、築地鉄砲洲豊前中津藩中屋敷

現、東京都中央区明石町（都電築地下車、または東京駅八重洲口より鉄砲洲行都バスにて明石町下車）

## 7 玄白終焉地

玄白は安永五年（一七七六）四四才の時、浜町の竹本藤兵衛所有の地を借り、ここに移り住み、伯元もここに住んでいた。文化十四年（一八一七）に死んだのもこの地である。近くに山伏井戸という有名な井戸があつて、江戸切絵図によるとその手前に杉田家が載つている。今は区劃整理で道路になつてしまつた。

旧、浜町河岸山伏井戸

現、東京都中央区浜町三丁目地先道路（都電浜町中ノ橋下車）

## 8 玄白墓

浄土宗の名刹天徳寺に葬られたという記事もあるが、正しくは塔頭の栄閑院（俗称猿寺）である。昭和四年に墓地整理のため改葬され今は本堂右手にあり、伯元・立卿・恭卿・成卿および子孫の墓は一基に合葬されて共同墓地内にある。墓石は旧時のものでなく、正面に『九幸杉田先生之墓』左に歿年、右に贈位の位記を刻す。大正十三年指定史蹟。

旧、芝西久保天徳寺塔頭栄閑院

現、東京都港区芝西久保巴町栄閑院（都電西久保巴町下車）

(附) 玄白関係研究概説書および主要研究論

文一覽

杉田玄白に関する単行本と研究論文は、彼の日本医学史上に占める地位に比例して、実におびただしい数に上つている。しかし、今日までのところまがきにも記したように真に彼の全貌と業績をまとめた完全な評伝や全集はない。ここには編者の管見に入つたものを単行本と雑誌掲載の論文について年代順に列記した。脱漏も少くないが、これで主要なものはほとんど網羅したつもりである。なお、明治・大正時代のものは単なる紹介や随想の類が多いので、基本文献に止めて割愛した。また大きなテーマ、たとえば蘭学とか日本医学史などについて書かれたものの中に、杉田玄白に関する記載のあるものも大部分は省略した(富士川游氏「日本医学史」、科学博物館編「江戸時代の科学」、拙著「医史学概説」および人名辞書、年表など)、脱漏については御教示により、完全を期したい。外国文献もすべて省略した。

単行本

杉田玄白先生贈位祝賀会紀事 明41

大槻如電 新撰洋学年表 昭2

野上豊一郎校註 蘭学事始(岩波文庫) 昭5

関場不二彦 西医学東漸史話 昭8

上村勝弥編 杉田玄伯集(大日本思想全集第12卷) 昭9

滝浦文弥校註 形影夜話 昭11

吉田三郎 杉田玄白(日本教育家文庫37卷) 昭12

森銑三 おらんだ正月——日本の科学者たち——(富山房

文庫) 昭13

岩崎克己 前野蘭化 昭13

板沢武雄 杉田玄白の蘭学事始(ラジオ新書) 昭15

緒方富雄訳 蘭学事始 昭16

和田信二郎 中川淳庵先生 昭16

岩熊哲 解体新書を中心とする解剖学書誌 昭19

杉靖三郎編 鸚齊日録(杉田玄白全集第1巻) 昭19

第2巻以下未刊

緒方富雄訳 自分の影との対話 昭22

緒方富雄 蘭学のこと 昭23

内山孝一校訂 和蘭事始 23

和田信二郎 校定蘭学事始 昭25

岡村千曳 紅毛文化史話 昭28

清水信夫 杉田玄白——蘭医学開拓の父—— 昭28

小川鼎三 杉田玄白(少年伝記文庫) 昭31

雑誌掲載論文

富士川游 蘭東事始 医談22号 明28

富士川游 杉田玄白伝 徳川三百年史中巻 明38

森銑三 杉田玄白の後見草 歴史地理51巻6号 昭2

内山孝一 解体新書の生理学的記載 醱酵 昭2

平光吾一 杉田玄白の神経液説 日本医事新報一〇四五号 昭3

昭3

呉秀三 我邦漢方医および蘭方医の最初の解剖に関する説

史余談 中外医事新報一一四三号以下 昭4

呉秀三 解体新書の原書並びに解体新書に引用せる諸の原

書の著者 中外医事新報一一五六号 昭5

森銑三 杉田伯元の観源為朝遺器本末紀事 中外医事新報

一一五八号 昭5

呉秀三 解体新書の原本と訳文との対照 中外医事新報一

一五九号 昭5

小川劍三郎 解体新書が眼科におよぼせる影響 中外医事

新報一一六一号 昭5

河本重次郎 クルムスの解剖書 千葉医学会雑誌11巻1号

昭8

長与又郎 蘭学事始瑣談 中外医事新報一二一二号 昭9

真鍋由郎 蘭学と杉田玄白 新星4号 昭11

内山孝一 杉田玄白翁の日記 科学6巻7号 昭11

高浜二郎 杉田玄白の手記鸚齊日録 歴史地理68巻3号

昭11

原田謙太郎 杉田玄白の鸚齊日録 中央公論 51巻8号

昭11

内山孝一 医人の面影——杉田玄白先生——実験治療一七

四号 昭11

和田信二郎 杉田玄白先生ノ鸚齊ニ就テ 雲城6月号 昭

12

高浜二郎 知られざりし柴野栗山と杉田玄白との交遊 伝

記3巻12号 昭12

鶴田勢湖 若狭医官杉田甫仙・杉田玄白先生旧墓域(麿

滅)の墓碑文 掃苔 昭12

鈴木元造 安永七年写杉田・建部両医贈答書玄白国手狂医

之言 中外医事新報一二五六号 昭14

滝浦文弥 杉田玄白先生年譜 日本医事新報八八二号 昭

14

岩熊哲 解体新書および外科訓蒙図彙に現れたるヴェサリ

ウスの解剖図に就て 中外医事新報一二七五号 昭15

佐伯理一郎 ドクトル・ホイトニーと杉田玄白 医界週報

三二四号 昭15

岩崎克己 蘭学事始の異本蘭東事始に就いて 書物展望11

巻5号 昭16

岩熊哲 ワルエルダ解体書に就て 日本医史学雑誌1巻1

号 昭16

滝浦文弥 玄白雑考 医界週報三四四号 昭16

滝浦文弥 杉田玄白の九幸鸚齊号考 医譚9号 昭16

滝浦文弥 和蘭医事問答に就て 日本医事新報九六〇号

昭16

山崎佐 亮策と伯元 医譚10号 昭16

佐伯理一郎 ドクトル・ホイトニー著英文日本医学史と杉

田玄白 医譚8号 昭16

川並秀雄 杉田鸚齊とその称号 医譚8号 昭16

岩崎克己 和蘭医事問答に現れた蘭書 医譚11号 昭16

滝浦文弥 杉田玄白と小石元俊 医譚11号 昭16

岩崎克己 蘭東事始の序文 学苑9巻1号 昭17

山崎佐 富士川師筆録蘭東事始に就いて 日本医史学雑誌

2巻1号 昭17

原田謙太郎 狂医之言 日本医事新報一〇四五号 昭17

藤浪剛一 解剖学の発達 日本医史学雑誌2巻10号 昭17

緒方富雄 杉田玄白の解体約図の紹介 日本医史学雑誌3

巻6号 昭18  
原田謙太郎 大槻玄幹の蘭学事始附記 日本医史学雑誌3

巻9号 昭18

原田謙太郎 蠹魚談語 保険医学雑誌41巻 昭19

緒方富雄 蘭学事始研究の進歩 文学15巻9号 昭22

杉靖三郎 杉田玄白著乱心廿四カ条 綜合医学5巻23・24

号 昭23

富田正文 和蘭事始と蘭学事始——福沢家所蔵の一写本に

ついて——史学24巻2・3号 昭25

杉村七太郎 解体新書と小野田直武 東京医事新誌67巻10

号 昭25

杉村七太郎 再び解体新書と小野田直武について 秋田県

医師会雑誌3巻2号 昭26

石原明 蘭学事始の諸問題 綜合医学8巻4号 昭26

医学古典会 復原試作蘭学事始 医学のあゆみ11巻4号

昭26

緒方富雄 気持ちが医者のことば 医学のあゆみ11巻5号

以下 昭26

大島蘭三郎 杉田玄白の人格に寄せて 医学生とインタ

ン2巻4号 昭27

大島蘭三郎 解体新書の絵とびらの原図について 医学の

あゆみ18巻3号 昭29

内山孝一 蘭学事始について 学鏡53巻2号 昭31

安西安周 蘭医杉田家代々の遺墨について 日本医師会雜

誌35巻11号 昭31

# 杉田玄白年譜

杉田玄白の年譜は、すでに早く大槻如電氏が明治四〇年

杉田玄白一才（享保十八年、一七三三）

に贈位のあつた機会に作つたのを初め、それ以前にも富士川游氏が「徳川三百年史」中に玄白伝を執筆された折にも簡単なものを附せられ、ややまとまつて公表されたものとしては、滝浦文弥氏のもの（前掲、論文一覽参照）もある。

二才（享保十九年、一七三四）

最近、小川鼎三氏の書かれた書物に附録された年譜は、

クルムス解剖書の蘭訳と仏訳出版。

通俗を主にしたものはあるが、最もすぐれているので、ここでは小川鼎三氏の年譜をもとし、今回新出のいろいろな記録を抄出して増訂し、ほぼ完璧を期した。一々の事項の出典は省略したが、玄白の生涯を知るに不足はないことと思う。脱誤も存すると考えるが、将来の決定版出現を期待して、それまでの渴を医すことができるならば、編者として望外の喜びである。

三才（享保二十年、一七三五）

青木昆陽「蕃薯考」出版。○ケイズル江戸に來り西洋馬術伝授。

四才（元文元年、一七三六）

和蘭通詞今村市兵衛歿（六六）。

五才（元文二年、一七三七）

天文家北島見信「紅毛天地二國贅説」著。

六才（元文三年、一七三八）

幕命により鎌倉由比ヶ浜にて大砲発射演習を再興。



七才（元文四年、一七三九）

青木昆陽と野呂元丈兩人幕府に召さる。

八才（元文五年、一七四〇）

右兩人幕命により蘭語を学ぶ○天文家西川正休幕府に召さる。

九才（寛保元年、一七四一）

野呂元丈「阿蘭陀本草和解」第一編上進。

十才（寛保二年、一七四二）

青木昆陽「和蘭貨幣考」著。

セルズ温度の分画を定む（撰氏温度）。

十一才（寛保三年、一七四三）

青木昆陽「和蘭話訳」著、最初の語法書。

十二才（延享元年、一七四四）

青木昆陽「和蘭文字略考」を献上○神田佐久間町に天文台設立。

十三才（延享二年、一七四五）

長崎通詞ら蘭書読訳許可○八代將軍吉宗退職。

クルムス歿（六六）。

十四才（延享三年、一七四六）

青木昆陽「和蘭桜木説・一角説」著、また「和蘭文字略考」

再修。

十五才（延享四年、一七四七）

外科医桂川甫筑歿（八九）。

ラメトリー「人間機械論」刊。

十六才（寛延元年、一七四八）

この頃より宮瀬竜門につき漢学を学ぶ。

十七才（寛延二年、一七四九）

西玄哲の門に入りオランダ流外科を学ぶ。

和蘭通詞本木仁太夫歿（五五）。

ゲーテ生る。

十八才（寛延三年、一七五〇）

天文方淡川六藏改曆御用にて上洛の途死す○野呂元丈の本草和解此年にて止む。

十九才（宝暦元年、一七五一）

徳川吉宗歿（六八）。

フランス「大百科事典」成る。

二十才（宝暦二年、一七五二）

酒井侯に召され、仕籍に加えられて部屋住となる。

本草家丹羽正伯歿（五三）。

フランクリン避雷針発明。

二一才 (宝曆三年、一七五三)

正月、五人扶持を給せらる。

平賀源内江戸に来る。

大英博物館創立。

二二才 (宝曆四年、一七五四)

秋、小杉玄適より山脇東洋の解剖の状況を聴く。

閏二月七日、山脇東洋初めて京都にて人体解剖を観察○宝曆

の改暦。

二三才 (宝曆五年、一七五五)

神田天文台にて秋分点と冬至点を実測。

二四才 (宝曆六年、一七五六)

天文家西川正休歿 (六〇)。

二五才 (宝曆七年、一七五七)

別俸を給せられたので、許可を得て藩邸を出で日本橋通

四丁目を開業。

神田天文台廃止、設置より十四年○カピタンら大阪にてカラ

クリを観て感嘆。

二六才 (宝曆八年、一七五八)

この頃漢方外科書を集めて「瘍科大成」と「広瘡総論」

を編す。

伊良子光顕が伏見で、栗山孝庵が荻で各々人体解剖を観察。

二七才 (宝曆九年、一七五九)

栗山孝庵、荻において初めて女性の解剖をみる。○山脇東洋

「蔵志」出版、最初の人体解剖観察記録○平賀源内、湯島に

物産会を開く。

二八才 (宝曆十年、一七六〇)

二月、火災により日本橋箔屋町に移転。

西玄哲歿 (八〇)○青木昆陽「昆陽漫録」成る。

二九才 (宝曆十一年、一七六一)

野呂元丈歿 (六九)○平賀源内致仕。

三〇才 (宝曆十二年、一七六二)

二月、再び火災のため日本橋堀留町に移転。

山脇東洋歿 (五八)○合田剛「紅毛医言」著。

三一才 (宝曆十三年、一七六三)

麻田剛立日蝕を予言○平賀源内の「物類品牘」成る○本草家

田村元雄幕府に召さる○広東人參專売制。

三二才 (明和元年、一七六四)

平賀源内始めて火洗布を作る○人參座設置。

三三才 (明和二年、一七六五)

日光の御用を勤め、奥医師に昇進。

後藤製春の「紅毛談」出版、直ちに発禁○天文台を生込に置く○奥医師多紀安元に医学館設立許可。

### 三四才（明和三年、一七六六）

医学出精により三人扶持加増。

前野良沢オランダ語を青木昆陽に学ぶ○津軽大地震。

### 三五才（明和四年、一七六七）

春、カピタン江戸参府に際し前野良沢と共に通詞西善三郎に会い、オランダ語について質問。

山県大式処刑。

### 三六才（明和五年、一七六八）

三月、吉雄耕牛よりヘイステル外科書を借りその図を写す。ついで、医官バブルの手術を見て感嘆。

和蘭大通詞西善三郎歿（五二）○上田秋成「雨月物語」著○平賀源内寒暖計創製。

### 三七才（明和六年、一七六九）

父二代目甫仙七九才にして死す○侍医を継ぎ新大橋の酒井侯中屋敷に移る。

青木昆陽歿（七二）

イギリス産業革命始まる。

### 三八才（明和七年、一七七〇）

河口信任ら京都で解剖を観察○前野良沢長崎遊学○平賀源内エレキテルを作る。

### 三九才（明和八年、一七七二）

「ターヘル・アナトミア」を入手○三月四日千住骨ヶ原において解剖を観察し、蘭書の精巧に感じ直ちに反訳に着手。

島津重豪長崎にてオランダ船をみる○麻田剛立脱藩○玄白の漢学の師、宮瀬竜門歿（五三）

### 四〇才（安永元年、一七七二）

四月より内科を兼任○「ターヘル・アナトミア」反訳の業進み即夜草稿をまとむ。

河口信任の解剖記録「解屍編」出版○本木良意遺稿「和蘭全軀内外分合図」と題し出版（切り型解剖図）○田沼意次老中となる。

### 四一才（安永二年、一七七三）

正月「解体約図」出版○一関藩医建部清庵と交通始まる○安東と姦と結婚。

古方医家吉益東洞歿（七二）○医学館再建費下附○前野良沢長崎再遊。

### 四二才（安永三年、一七七四）

八月「解体新書」出版○秋、老中および五撰家に進献。

**四三才**（安永四年、一七七五）

十月「狂医之言」を書く。

長久保赤水初めて経緯度入り日本地図を作る○山脇東門京都で解剖を観察。

米国独立戦争。

**四四才**（安永五年、一七七六）

この頃「的里亜加纂稿」をまとむ○日本橋浜町河岸山伏井戸の新居に移転。

ツンベリー江戶参府。

米国独立宣言。

**四五才**（安永六年、一七七七）

ヘイステル外科書の反訳に励む。

サラトガの戦。

**四六才**（安永七年、一七七八）

大槻玄沢入門。（二三）。

三浦梅園長崎遊学。

**四七才**（安永八年、一七七九）

この頃「大西瘍科書」草稿成る。

平賀源内歿（五七）。

**四八才**（安永九年、一七八〇）

平賀源内のため墓誌銘を撰し、碑に刻したが罪人の故に削り去らる。

大槻玄沢さらに前野良沢の教えをうく○「解体新書」附図の版下を描いた秋田藩の洋画家小野田直武歿（三二）。

**四九才**（天明元年、一七八一）

六月さらに五人扶持加増○平賀源内三周忌を営み遺族に手紙を送る。

**五〇才**（天明二年、一七八二）

五月、建部清庵の五男亮策を養子とし、伯元と改む。

建部清庵歿（七二）○山脇東門歿（四七）○牛込天文台を浅

草に移転。

清の四庫全書成る。

**五一才**（天明三年、一七八三）

吉原の楼主の請により「乱心廿四カ条」を書く。

熱気球昇る。

**五二才**（天明四年、一七八四）

養子伯元、三人扶持を給う。

玄白の連歌の師、阪昌周死す。

**五三才**（天明五年、一七八五）

夏、藩主に従い本国小浜に入部

大槻玄沢長崎遊学○前野良沢「和蘭訳筈」を増訂。

五四才（天明六年、一七八六）

小石元俊蘭学を学ぶ○十一月、実子立柳生る。

中川淳庵歿（四八）○林子平「海国兵談」公刊○最上徳内蝦

夷巡視。

五五才（天明七年、一七八七）

養子伯元、小石元俊に従い上洛○「後見草」脱稿。

家斉將軍宣下○松平定信老中となる。

五六才（天明八年、一七八八）

一月二十日、妻とゑが四三才で死去○伯元を柴野栗山の

門に入らしむ。

大槻玄沢の「蘭学階梯」出版○柴野栗山昌平校の教職につく

○田沼意次歿（七〇）

五七才（寛政元年、一七八九）

七月、後妻いよの長女藤（とう）生る。

大槻玄沢、蘭学塾の規則を作る○三浦梅園歿（六〇）

フランス大革命。

五八才（寛政二年、一七九〇）

十二月、解剖をみる。

寛政異学の禁○カピタン江戸参府を五年毎とす。

メートル法決定。

五九才（寛政三年、一七九二）

六月、後妻いよの次女そめ生る。

医学館官設○蘭文和解相違にて長崎の通詞七人官を罷む。

六〇才（寛政四年、一七九二）

春、子孫のために「百鶴図」を描く○十一月二日、玄白

六十才前野良沢七十才の合同賀宴○十二月、伯元が内科

を兼任。

林子平の「海国兵談」事件○宇田川玄随訳「西説内科撰要」

成る（明年より刊行）。

六一才（寛政五年、一七九三）

六月、祿高二百二十石○玄白の長女扇が養子の伯元と結

婚。

大槻玄沢訳「瘍医新書」五十巻完成○林子平歿（五六）○露

国漂流の漁父大黒屋幸太夫引見。

六二才（寛政六年、一七九四）

玄白に初孫生る（のちの恭卿、伯元長男）

大槻玄沢首唱し初めて太陽暦の元且を祝う（新元会の始め）。

六三才（寛政七年、一七九五）

伯元ら玄白と清庵の書簡をまとめ「和蘭医事問答」と題して出版。

高橋作左衛門、天文方となる。

ポーランド滅亡。

### 六四才（寛政八年、一七九六）

稲村三伯「ハルマ和解」成る。

ジェンナー牛痘接種法発明。

### 六五才（寛政九年、一七九七）

宇田川玄随死後、安岡玄真を養子とす○長崎の通詞ら蘭書和解掛を拜命○昌平坂学問所設立○伏屋琴阪、尿生成の漉説を唱う。

### 六六才（寛政十年、一七九八）

三月、参府のオランダ人に会う○六月、書斎新築○十一月、広島島の星野良悦の木骨をみて激賞○十二月、孫の鶴（伯元第二子）生る。

玄沢改訳の「重訂解体新書」完成○近藤重蔵エトロフ島に標柱を立つ。

### 六七才（寛政十一年、一七九九）

麻田剛立歿（六六）。

### 六八才（寛政十二年、一八〇〇）

吉雄耕牛歿（七七）○伊能忠敬、北海道測量。

ナポレオン、アルプス越。

### 六九才（享和元年、一八〇一）

一月、五十年勤続の賀宴を開く○夏、知友に「養生七不可」を施印○十月、「鶴龜の夢」を作る。

小石元俊、京都に塾を開く○本居宣長歿（七二）○長久保赤水歿（八五）

### 七〇才（享和二年、一八〇二）

三月、感冒により就床二カ月○六月、二番目の男の孫生る（恭卿弟、のちの白玄）○九月、玄白七十才前野良沢八十才の合同賀宴開く○十一月、当直の余暇「形影夜話」を著作。

十返舎一九「東海道膝栗毛」初編出版○山片蟠桃「夢之代」脱稿。

### 七一才（享和三年、一八〇三）

前野良沢歿（八一）

### 七二才（文化元年、一八〇四）

後妻いよの長子立卿十九才、別に一家を立て眼科を専門とす。

露使レザノフ長崎に来る。

ナポレオン即位。

七三才（文化二年、一八〇五）

一月、眼疾を患い立卿加療○二月、伯元第四子竹生る○

六月、將軍家齊に拜謁○「玉味噌」を著作。

宇田川玄真の解剖書「医範提綱」成る○華岡青洲始めて全身  
麻醉に成功○伏屋琴阪「和蘭医話」出版。

七四才（文化三年、一八〇六）

ロシア人エトロフ占拠。

神聖ローマ帝国滅亡。

七五才（文化四年、一八〇七）

家督を養子伯元に譲り隠居○「野叟独語」を脱稿し筐底  
に秘す。

山村才助歿（三八）○柴野栗山歿（七四）。

フルトン汽船を發明。

七六才（文化五年、一八〇八）

間宮林蔵樺太探險に出発○最初の銅版解剖図「内象銅版図」

中田善吉刻により出版○英船長崎に不法入港（フェートン号

事件）。

七七才（文化六年、一八〇九）

四月、喜寿に際し「西洋医術之要」を揮毫○六月、伯元

が家蔵の蘭書を献上し金二十両を賞賜さる。

桂川甫周歿（五九）。

ラマルク進化論を唱う。

七八才（文化七年、一八一〇）

三月、伯元と立卿江戸参府のオランダ人に会う○九月、

石川大浪、玄白の肖像を描く○十月、伯元の賞賜金によ  
り大浪筆の肖像を加えて「形影夜話」を出版。

小野蘭山歿（八二）○森島中良歿（五五）。

七九才（文化八年、一八一一）

閏三月、重病回復により祝餅を配る○秋、夢想の自画像  
を描く○十二月、石川大浪再び肖像を描く。

橋本宗吉「エレキテル究理原」著○蚕書和解御用局設立○稲

村三伯歿（五三）。

八〇才（文化九年、一八一二）

元旦、大浪筆の肖像に賛を加う。

ナポレオン、ロシア遠征失敗。

八一才（文化十年、一八一三）

露使ゴローニン放逐。

自由大戦争。

八二才（文化十一年、一八一四）

玄白の孫恭卿夭折、年二一。

伊能忠敬「沿海実測全図」完成。

八三才（文化十二年、一八一五）

春、回顧録の下書を作り、大槻玄沢に校訂を依頼（のち

の「蘭学事始」）

杉田立卿訳「眼科新書」出版○石川玄常歿（七二）○桐山正

哲歿（不詳）

ナポレオン流罪。

八四才（文化十三年、一八一六）

「耄耋独語」を著作○九月、大槻玄沢の還暦を祝い寿歌

を贈る。

国友一貫育、空気銃と望遠鏡を製作。

オランダ、ジャワを占領。

八五才（文化十四年、一八一七）

四月十七日、光輝ある生涯を閉ず。芝天徳寺中栄閑院に

葬る。

英船浦賀に来る○十一月、立卿の子成卿生る。

### 主要研究論文一覽 補遺

脱稿後、杉田玄白関係の主要研究論文として左の数編の脱漏に  
気づいたのでここに追加する。

富士川游 前野蘭化先生 中外医事新報三〇〇号 明25

大沢岳太郎 解体新書ノ原本ノ著者及同書引用書目中ニ載

スル処ノ著者ノ略伝 中外医事新報三三一号以下

明27

呉秀三 和蘭流外科について 史学雑誌33編2号 大11

大鳥蘭三郎 我医学に使用せらるゝ解剖語彙の変遷 中外

医事新報一一八九号以下 昭7・8

伊藤篤太郎 家蔵ノ和蘭解体書クルムスノターヘル・アナ

トミアト同書ノ和解ニ就テ 解剖学雑誌10巻5号 昭12

岩熊哲 クルムス解剖書誌 日本医事新報九五〇号 昭15

緒方富雄 杉田玄白の解体約図について 科学史研究6号

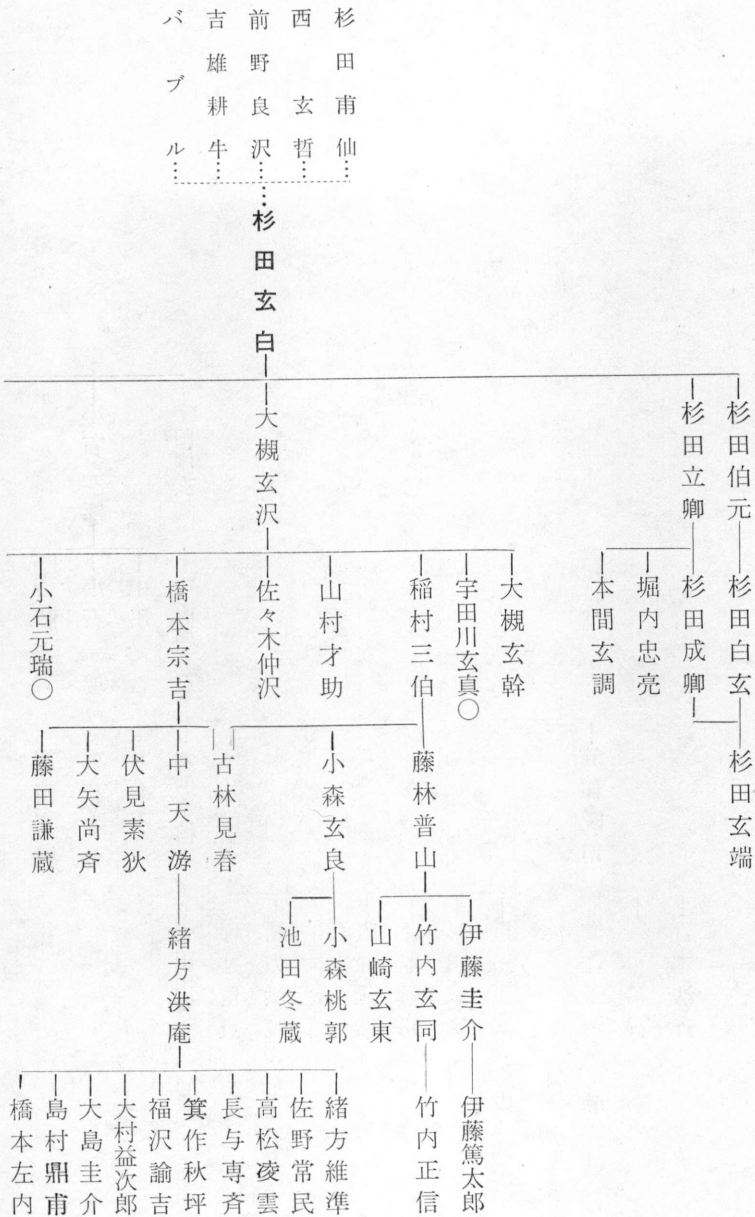
昭18

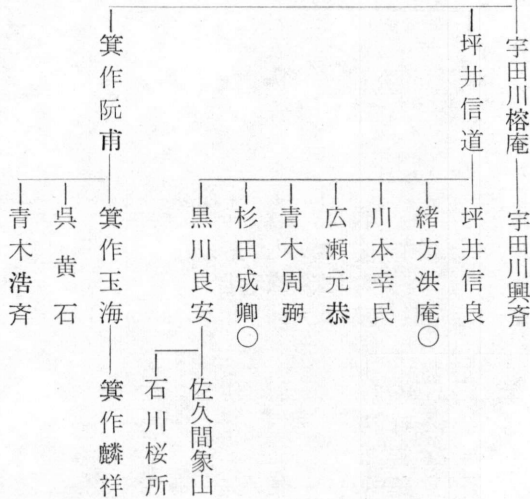
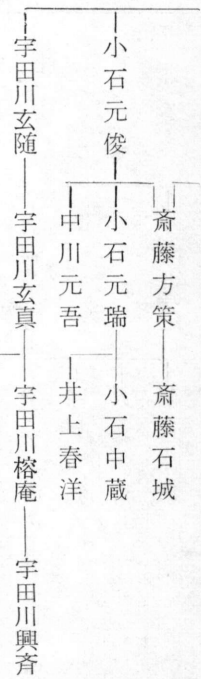
石橋栄達 解体約図についての補訂 科学史研究7号 昭

18



# 杉田玄白の学統





(註)

この学統図は明治初年に止め  
医学に直接関係しない者や同  
族の者は省略し、主要なもの  
のみとした。○印は重出。

## 杉田玄白の家系

ここに掲げた家系は従来知られている「杉田家略系」をもととし、今回新出の「杉田家記」によつて新たに編したものである。宇多天皇に端を發する近江源氏佐々木氏流の眞野氏から出た間宮氏が家祖であるが、この系図では前半は必要がないから省略し、始めて間宮氏を称した信行から現在当主に至るまで知り得る限りの人を網羅した。しかし、あくまで未定稿であつて、法名のみ記載していて俗名の明かでない者は性別のみを示した。また生歿年の不明の者は知り得たものだけを記しておいた。Ⅱの符号は夫婦關係を示し、△は養子を示す。また名の下の番号は後掲の要項の見出しである。

従来の系図の標示法と異つて、なるべく母系を明かにし、相続關係を主とせずに子を長幼の順に示した。

この系図は始めて公表したもので、可能な限り正確を期したがなお誤脱を免れないと思う。将来新たな資料の出現に期待するものである。

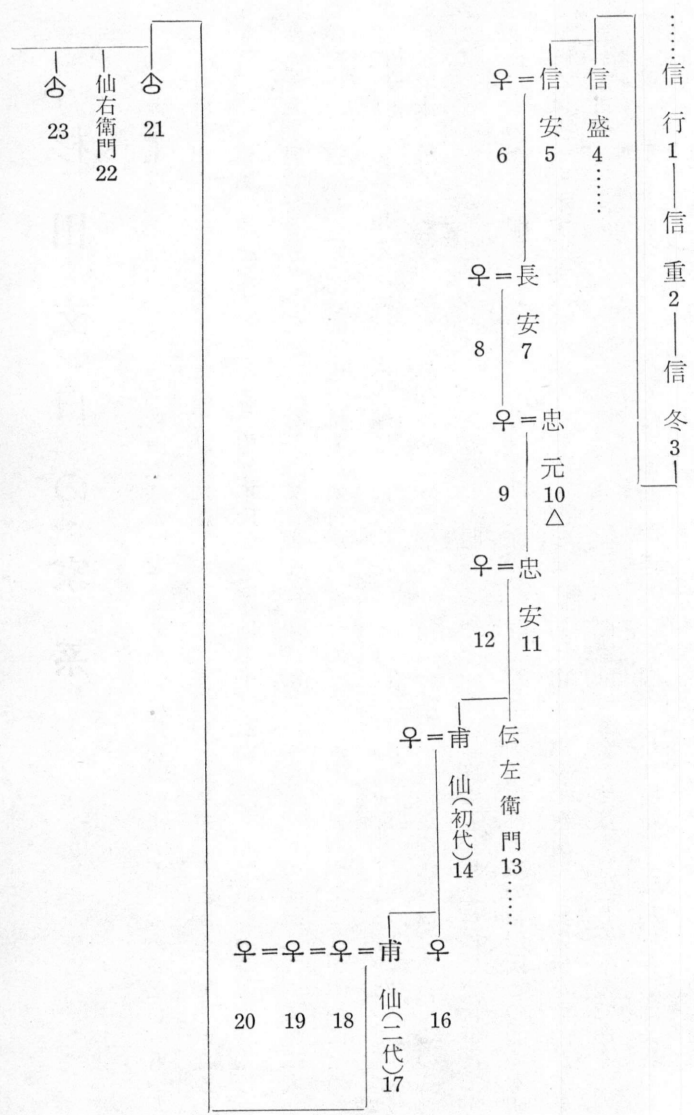
今まで世上に流布していた系図では間宮氏から杉田氏を

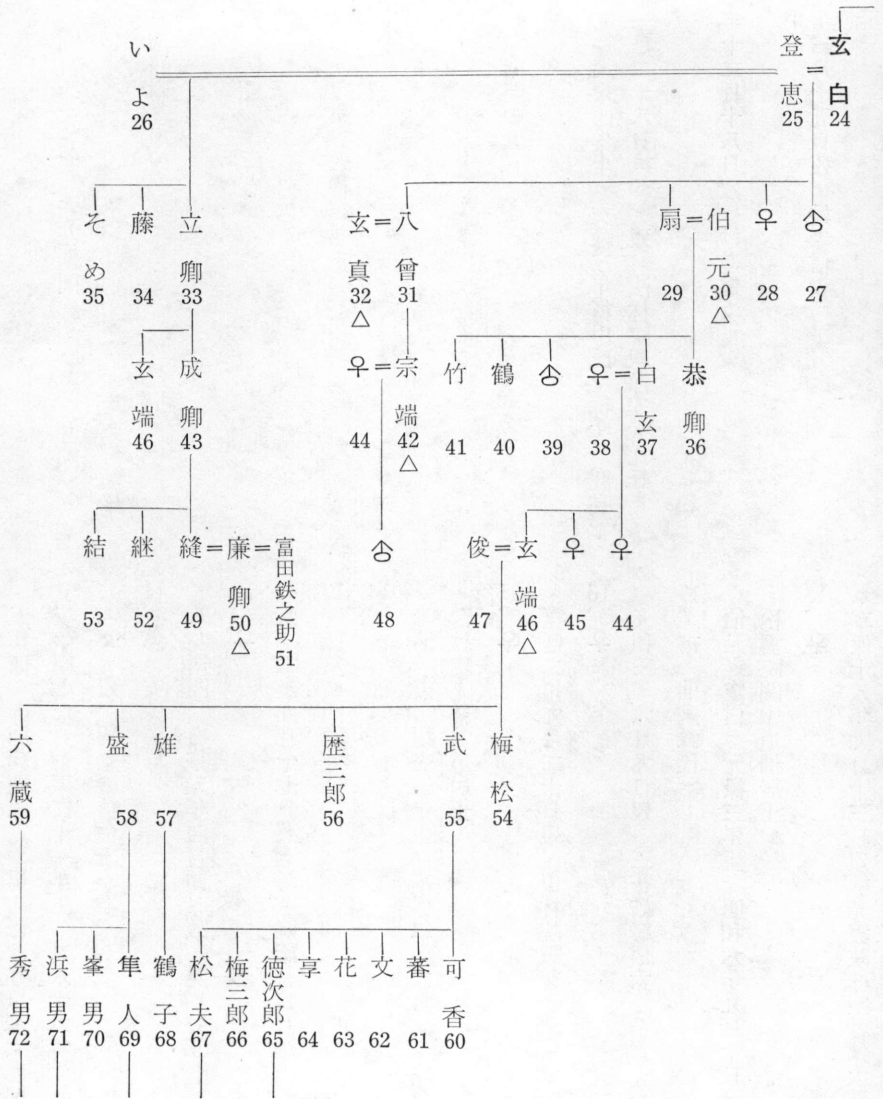
名乗つた長安の前後が不明であつたし、もつとも重要なことは玄白の兄姉や継母などが全く知られなかつた。二代甫仙の子は玄白ただ一人であるかのような感じを与えていたのであるが、「家記」の記載によつて兄二人と姉一人があつて、玄白は末子であつたことが明かになつた。長兄は天死、次兄は他家を継ぎ、姉は嫁いだったので、結局玄白が二代甫仙の跡目相続となつたわけである。このことは「由緒書」やその他の記録にも全く見られない新事実である。

また武蔵国橋樹郡藏敷の杉田氏との關係も明かになり、初代甫仙は忠安の次男で、兄の伝左衛門が本系を継ぎ、弟の甫仙は分家して医を業としたものである。

系図はかなり複雑であるから表示は人名のみに止め、要項は別記した。法名の院号の次に点線で示したのは「家記」にこれだけしか記していないことを示す。また、歿年月日の次の西洋数字は享年である。墓地はすべて省略した。

杉田家系図 (未定稿、禁転載)





1、信 行

眞野氏 間宮氏を称す 新左衛門

2、信 重

豊前守右衛門尉 通円

3、信 冬

新左衛門 宝能

4、信 盛

豊前守信三 宝泉寺殿禪定門

5、信 安

主水佐

6♀

行方彈正左衛門の女

7、長 安

主水次郎 大永四年生 文祿三年杉田氏を称す 慶長十

七年十一月二十八日(89)歿 法林院釈浄安大比丘

8、♀

寛文元年十二月十八日歿 妙遵信女

9、♀

寛文四年三月十五日歿 妙孝信女

10、忠 元

五兵衛 森加兵衛忠重の男 母は井口采女忠興の女 長

安の婿となる 天文十一年生 寛永十六年十月二十八日

(98)歿 釈窓巖善信士

11、忠 安

八左衛門 貞享元年四月四日歿 見樹院正誓直心居士

12、♀

貞享二年九月十七日歿 誓敬院耀誉良月信女

13、伝左衛門

14、甫 仙(初代)

元伯 東 慶安三年生 享保二年九月二十二日(68)歿

台教院光誉覚道居士

15、♀

寛延二年九月二十日歿 貞林院誠誉心清信女

16、♀

天和三年六月九日歿 三誉妙縁信女

17、甫 仙(二代)

伯元 定信 元禄三年生 明和六年九月十日(79)歿

松雲院閑山道仙居士

18、♀

享保十八年九月十三日歿 光雲院桂室妙仙大姉

19、 早

寛保三年六月二十七日歿 戒光為禪大姉

20、 早

宝曆六年四月四日歿 宝池院乘誉蓮清信女

21、 忬

元文六年二月十日歿 覚林了幻童子

22、 仙右衛門

他家を相続 釈教善信士

23、 早

宝曆三年六月十一日歿 智光院夏月惠照信女

24、 玄白

翼 子鳳 鸚齋 九幸 天真楼 小詩僊堂 享保十八年

九月十三日生 文化十四年四月十七日(85)歿 九幸院

仁誉義真玄白居士 明治四十年十一月十五日特旨を以つ

て正四位を贈らる

25、 登 惠

安東氏 延享三年生 天明八年正月二十日(43)歿 浄

心院清誉光顔大姉

26、 いよ

天保元年八月十三日歿 信受院教誉貞念信女

27、 忬

天明四年正月十一日歿 春了童子

28、 早

寛政十年十月二日歿 天含童女

29、 扇(せん)

安永三年生 弘化二年六月二日(72)歿 五明院涼誉清

境大姉

30、 伯元

亮策 勤 公勤 士業 紫石 玄白 牆東居士 建部清

庵の五男 宝曆十三年八月七日生 天明二年五月十五日

(20)養子 寛政五年(31)結婚 天保四年五月二十一

日(71)歿 瑶池院円誉浄照居士

31、 八 曾(やそ)

32、 玄 真

弘化元年十二月十七日歿? 信敬院妙浄日心法尼?

璘(宇田川榛齋)安岡氏 明和六年生 養子となり結婚

したが年を経ずして離縁 寛政十一年宇田川家を継ぐ

33、 立 卿

豫 義兼 甫仙 錦腸 天明六年十一月十五日生 文化

元年十一月十九日別家 弘化二年十一月二日(60)歿

寿泉院得誉無疆樂道居士

34、藤(とう)

寛政元年七月十八日生

35、そめ

寛政三年六月十七日生

36、恭 卿

靖 松鶴 蘭園 寛政六年生 文化十一年八月十四日

(21) 歿 鶴林院威徳松山居士

37、白 玄

玄 梅庵 梅園 榎園 享和二年六月十四日生 明治七

年九月十九日(73) 歿 榎園院……

38、♀

文化三年十一月十一日生 明治二十五年三月三十日(88)

歿 柳枝院……

39、♂

文化七年十一月二十五日歿 露散童子

40、鶴

元治二年二月六日歿 鶴童院仙誉延寿妙等大姉

41、竹

文化二年二月三日生 天保十年六月二十二日(35) 歿

円明院寂室自照大姉

42、宗 端

養子 慶応三年九月二十三日歿 孤竹院……

43、成 卿

信 梅里 文化十四年十一月十一日生 安政六年二月十

九日(43) 歿 梅里院園誉秀香現奇居士

44、♀

慶応四年四月十七日歿 玉仙院……

45、♀

文政十一年十二月二十六日歿 誓光童女

46、玄 端

抃 文政元年九月二十日生 弘化三年五月十五日(29)

養子 明治二十二年七月十九日(72) 歿

47、俊(しゅん)

文政十一年生 明治二十七年一月十九日(67) 歿

48、♂

慶応元年九月十七日歿 本光院……

49、縫(ぬい)

弘化四年生

50、廉 卿



廉 武田簡吾の弟 弘化二年生 安政六年四月三日(15)

養子明治三年二月二十日(26) 歿 廉隅院…

51、富田鉄之助

明治七年十月四日結婚

52、継(つぎ)

嘉永四年生

53、結(ゆう)

嘉永六年生

54、梅松

嘉永二年生 安政二年十月二日(7) 歿 梅松童子

55、武

武二郎 生民 文叔 梅邨 隆雪庵畔鷺 嘉永五年七月

十五日生 文久三年生民と改名 大正九年十二月三十一

日(69) 歿 隆信院誓蒼清澄武直居士

56、歴三郎

安政三年三月二十一日生 文久二年八月十三日(7) 歿

歴山童子

57、雄(いさを)

英吉郎 安政五年十二月二十二日生

58、盛(さかり)

鶴五郎 梅所 梅翁 元治元年五月二十七日生 明治元年(5) 廉卿の後を継ぐ

59、六歳

明治三年生 宗端の後を継ぐ 昭和二十一年十二月二十

五日(77) 歿

60、可香(かしゆく)

明治十一年八月五日生 同十二年八月六日(2) 歿

62、蕃(しげる)

明治十三年十月十二日生 同十四年十一月二十二日(2)

歿

62、文(ふみ)

明治十五年八月十五日生 同二十五年二月二日(11) 歿

64、花

明治十七年十二月十四日生 千葉県津田沼に現住

65、亨(こう)

明治十九年一月二十一日生 川崎に現住

65、徳次郎

明治二十三年七月十日生 昭和二十一年十一月十五日

(57) 歿

66、梅三郎

明治二十六年二月二日生 同四十年十一月二十一日(14)  
歿

67、松 夫

明治二十九年四月四日生 横浜に現住

68、鶴 子

明治十七年生 昭和三十二年四月二十日(74)歿

69、隼 人

明治二十九年九月十二日生 昭和十二年五月十九日(41)  
歿

歿

70、峯 男

大正十年六月九日歿

71、浜 男

明治三十八年十二月九日生 横須賀に現住

72、秀 男

明治三十六年三月十二日生 東京に現住

○関西支部創立二十年祝賀会……昭和十三年に中野操氏らの発起により杏林温故会として発足した団体は、機関誌「医譚」を刊行すること通巻三十号、昭和二十四年には日本医史学会関西支部と改め関西における特異な文化団体として活動してきたが、昨年は中野操氏の選歴にも当るので、去る十月二十七日大阪の牟田病院会議室にて盛大な祝賀会を挙行了した。東京からは内山理事長の代理として石原幹事が列席、祝辞を代読した。詳細は三月発行の「医譚」復刊十七号に掲載の予定。

○歯科医事衛生史後編完成……日本歯科医師会では、かねてから記念事業として表記の編集を計画してきたが、三年を費やしてこのほど漸く原稿が完成した。すでに先年発行した前編は明治三十九年までの歯科に関する一切の法令その他を収載し、後編の完成がまたれていた。今回は山田平太氏を中心に鋭意資料を集め、明治四十年の医師法改正より終戦までの関係事項を整理し委員会に附託の運びとなつた。公刊は今夏の予定である。

○再度杉田玄白展開催……昨年六月、杉田玄白一四〇年忌を記念して横浜の神奈川県立図書館で本会后援のもとに行われた杉田玄白展は、空前の盛況を呈し好評であつたところ、遠祖ゆかりの地である川崎市立高津図書館の希望により、とくに溝ノ口に關する杉田家資料を中心として十一月一日より三日間開催された。今回、地元の杉田家より玄白の祖父遺愛の薬師如来像や文書類、系図など数点が新たに公表されたことは同慶にたえない。

予定よりかなり遅れたが、ここに杉田玄白特集号をお届けすることになった。このような史料解題や年譜、系図などは基本史料になるものであるから、空想をまじえることや推測は許されず、一旦誤つて公表すると後世に誤つて害を永久に残すことになるので、編集にも執筆にも慎重を期して校正も数校を重ねたため予定を超過した次第である。頁数の関係からまたまた二号合併の特集号になつてしまつたが、内容をご覧になつただけは御了承願えるものと思う。

玄白自筆の百鶴図と大槻家のオランダ正月図とを原色版で複製することができた。ことに前者は未公開のものであるから興味も一段とわいてくるものと信ずる。製版の関係で本文中に刷りこめなかつたので別に添えることにした。お手数ながら十八頁と三十四頁にそれぞれ適当に貼つていただきたい。

この特集号は会員外の特志家からも熱心な希望があつたので、とくに百部を限つて別製とし、本文に収め得なかつた図版を八頁前附して上製本でお領らすることになつた。領価は五百円、希望者は石原幹事まで直接申出られたい。但し小部数のため売切の節は御了承を乞う。(石原記)

日本医史学雑誌 (第八卷 第三・四号)

昭和三十三年一月十日印刷  
昭和三十三年一月十五日発行

編集者

石

横浜市中央区長者町三ノ三二

発行所

日

本郷区板橋 日本医学社

印刷所

杉本

紙器印刷株式会社  
横浜市南区白妙町二ノ七



● 健保適用品

ドイツ・バイエル製

循環系障害に…

## カリクレイン

冠状動脈，脳，横紋筋，皮膚及び肺の末梢血管の拡張作用のみならず，血管痙攣の抑制作用もあり，全身の血行を改善し，組織への栄養を良好にいたします。

注：10単位	5管	¥ 840
〃	50管	¥ 5,800
錠：10単位	20錠	¥ 980
〃	100錠	¥ 4,300

強力治療には…

## デポ・カリクレイン

カリクレインの作用を，更に高度に且つ持続的に發揮せしめる目的でつくられた本剤は，循環系障害の強力治療に特に好適であります。

注：40単位	5管	¥ 1,800
〃	25管	¥ 7,900

輸入元 吉富製薬株式会社 大阪市東区道修町2-26  
販売元 武田薬品工業株式会社 大阪市東区道修町2-27

# 品質を誇る吉富製品

純国産クロルプロマジン

## コントミン

クロルプロマジンの適応領域は益々  
拡大され治療界に大きな進歩をもた  
らした。クロルプロマジン製剤は純  
国産のコントミンを御賞用下さい  
(包装)糖衣錠 5mg,12.5mg,25mg,50mg  
注 射 0.5% 1% 2.5%注。  
調剤用10倍散;シロップ0.2%

新抗ヒスタミン剤

## ヒベルナ

フェノチアジン系の新型抗ヒス  
タミン剤で、強力な抗ヒスタミ  
ン作用の他神経系に対して優れ  
た作用を有するので、強化麻酔  
人工冬眠にも用いられる。

(包装)糖衣錠 5mg 25mg  
注 射 2.5%注

副交感神経遮断剤

## エチレミン

コントミン、ヒベルナと共に一  
連のフェノチアジン系誘導体で  
特に副交感神経に対する作用が  
優れ、コントミンと共にカクテル  
として強化麻酔に用いられる  
他、パーキンソン氏病に著効を  
奏する。

(包装)注射 2.5% 5%注

糖衣錠 50mg, 250mg

静脈内全身麻酔剤

## イソゾール

本剤は新しい合成法でつくられたSodium  
5-allyl-5-(1-methylbutyl)-2-thio  
barbiturate で異性体を含まない。麻  
酔効果は強力、覚醒も迅速で呼吸抑制等  
の副作用は殆んどみられない。

(包装) 0.3g 5A, 50A (溶解液付)

0.5g ( )



製造 吉富製薬株式会社 販売 武田薬品工業株式会社  
大阪市東区道修町

(A-28)



# NIHON ISHIGAKU ZASSHI

---

Journal of the  
Japanese Society of Medical History.

---

Vol. 8 No.3.4.

January, 1958.

---

**Special Number for 140th  
Anniversary of Genpaku Sugita's Death:**

## CONTENTS

Foreword .....	(1)
Exposition on the materials for life of Genpaku Sugita.....	(3)
Chronicle on Genpaku Sugita (1733~1817) .....	(46)
Genealogical table of "Dutch study" (Rangaku) by Genpaku Sugita.....	(55)
Family tree of Genpaku Sugita.....	(57)
Epilogue.....	(65)

---

The Japanese Society of Medical History.

(Department of Physiology. Nihon University. School of Medicine.)

Itabashi. Tokyo Japan.